伏見蔵光庵　－「跡地」の歴史から考える－

佐々木　創

はじめに　蔵光庵研究の意義

１　蔵光庵研究の現状

２　蔵光庵資料における位置と由緒の検討

３　蔵光庵「跡地」の歴史　－移るものと残るもの－

４　「跡地」の歴史から考える伏見蔵光庵と「天神」

おわりに　これからの伏見研究に向けて

はじめに　蔵光庵研究の意義

蔵光庵とは、１４世紀後半から１６世紀後半にかけてのおよそ２００年間京都伏見に存在し、その後伏見城築城を機に嵯峨へと移転し天龍寺塔頭となった禅宗寺院である。

本稿は、蔵光庵に関わる「場」の問題（移転やそれに伴って生じる「跡地」の歴史など）に目を向け、蔵光庵跡地の変遷を通史的に理解することを通して、中世の蔵光庵の姿に迫ろうとする試みである。

そもそも、このような一寺院を取り上げて研究を行う意義はいかなる点に求められるだろうか。蔵光庵を研究することの意義について述べておきたい。

中世後期における蔵光庵は、大光明寺と共に京都における禅宗文化の一中心を築き、「天神画」を媒介とする渡唐天神信仰の発生地であった。[1]中世後期の伏見における文化・宗教を考える上で、あるいは説話文学的にも美術史的にも、蔵光庵は多くの研究課題を私たちに提供してくれる。

また、近世の蔵光庵は「山の天神」（＝蔵光庵移転後に蔵光庵内の天神が伏見に残り成立）との関わりにおいて地誌・古地図で語られる。そして、蔵光庵跡地・山の天神の歴史は、現在の桃山天満宮へと到るまでその痕跡を辿ることができるのである。

このように、山の天神との関わりから蔵光庵は近世の地誌類にも多く登場する。また渡唐天神信仰に関して言えば、その研究は文学・美術史・信仰史の面から数多くなされている。[2]それにも拘らず、その舞台の一つであった伏見蔵光庵のまとまった研究は皆無である。なぜだろうか。

私たちが中世の伏見を研究する際どうしても向き合わなければならないのが、伏見は豊臣秀吉の伏見城築城・城下町造営・道路の付替え・社寺や村の移転や、宇治川・巨椋池の河川改修など大規模な土木工事により姿を一変させられているという事実である。[3]

しかし、私たちもまた「どうせわからない」という諦めから、伏見における中世と近世の「断絶」に挑まないことが多いのではなかろうか。その結果、何が絶たれていて何が絶たれていないのかといった「断絶」の実態＝中世伏見研究の問題点が明らかとならず、必然的に網羅的資料収集も行われず、通史的整理もされていない状態が各分野において起こっているのである。

中世の伏見を研究する方法の一つとして、地誌や古地図の利用が挙げられるが、現状の伏見研究がこれらを資料として用いる際の史料批判を十分行った上でなされているとは言い難い。伏見に詳しい郷土史家の研究も内容ごとに記述が区々であり、私たちは典拠史料

にまで遡って史料批判を行った上で先行研究や地誌を利用する必要がある。

蔵光庵という一寺院を取り上げて同時代史的に・通史的に論ずる意義は、上記のような伏見研究における問題点を明らかにするきっかけとなり得る点にあると考える。また、既往の社寺移転や神祇研究においては「移転する神（社寺）」は論じられても「跡地に残る神（社寺）」についてはあまり論じられることが無かったのではないか。「神（社寺）の跡地を辿る」という本稿での方法論は、社寺移転の研究においても有効な視座となろう。

なお、本稿で用いる地域や蔵光庵・天神の名称についてその意味を定義しておく。

・「松平筑前」　：現桃山町松平筑前に加え、現桃山筑前台町を含む地域に対して用いる。
・「伏見蔵光庵」：成立以降、嵯峨に移転するまでの蔵光庵に対して用いる。
・「蔵光庵天神」：中世の蔵光庵に祀られていた「天神のみ」を言う場合に用いる。
・「嵯峨蔵光庵」：嵯峨に移転して以降の蔵光庵に対して用いる。
・「山の天神」　：近世、松平筑前に存在した天神に対して用いる。
・「桃山天満宮」：観音寺町に移転して以降の天神に対して用いる。

蔵光庵はほとんどの場合、単に「蔵光庵」として資料上に登場するのだが、その位置や時期を明確にする必要がある場合は以上の名称を用いる。

また、本稿では個々の資料について番号を付している。個々の資料を用いる場合には＜番号「資料名」＞あるいは番号のみで記した。資料および図表については末尾に資料集として付しているので適宜参照していただきたい。

それでは、２００６年度の『日本中世史演習活動報告書』（以下、２００６年度報告書）で行った蔵光庵に関する研究の成果と課題を元に分析を始めることとする。

１　蔵光庵研究の現状

まずは、私たちの蔵光庵に関する研究の成果および課題を提出し、本稿で行う作業の目標を明確にしておきたい。現時点での問題点は以下の２点に絞られる。

①伏見蔵光庵はどこにあったのか

②草創期の伏見蔵光庵と天皇家・伏見宮家との関わりがどのようなものであったのか

①伏見蔵光庵はどこにあったのか

私たちは２００６年度報告書において、地誌・古地図・先行研究に記された蔵光庵・山の天神・桃山天満宮を対象にその位置について分析を行った。その結果、上記の対象については A 松平筑前付近。B 泰長老付近。C 桃山町三河付近。D 観音寺町付近の４ヶ所にその記述が分類されることがわかった。図１「資料に見る蔵光庵・山の天神・桃山天満宮の位置」参照。

図１

まずは、ABCD それぞれの地点について、２００６年度報告書から分析結果を述べる。

A 松平筑前付近

山の天神・桃山天満宮については、多くの資料がＡをその場所としている。

D 観音寺町付近

荒廃した山の天神は、天保１３年（１８４１）に観音寺の住職によって観音寺の東に桃山天満宮として再興されており、Ｄはその観音寺および桃山天満宮の場所を示す。

B 泰長老付近・C 桃山町三河付近

Ｂ・Ｃは共に蔵光庵に関する記述による。２００６年度報告書では、桃山天満宮についてはＡ地点にのみその記述が限られ、Ｄの経緯も後の移転から説明可能であって「ある程度位置の推定がなされている」のに対して、蔵光庵の位置についてはその記述がＡ・Ｂ・Ｃと分散することから「諸説あり位置の推定が出来ていない」とした。この点については本稿の中心的課題として後に取り上げることとしたい。

②草創期の蔵光庵と天皇家・伏見宮家との関わりがどのようなものであったのか

先述の通り、蔵光庵が「どこに」建てられたのかが不明であるのと同様、「いつ」「誰が」建立したのかという点についても不明である。地誌・先行研究では南北朝時代の北朝

の３代、光厳院・光明院・崇光院との関わりで述べられることが多いが、その記述は区々である。

２００６年度報告書では、資料にも限りがあったためこの点を分析するには到らなかったが、創建の由来に関係する以下の点について分析を行った。

ａ蔵光庵という名称は何に由来するのか

山本真嗣氏は３２『京・伏見歴史の旅』において「天皇が「光」「蔵」れるという意味からここは“蔵光庵”と名づけられ」たと記す。意味を汲み取れば、崇光（＝当時落飾して法皇）という「光」が「蔵（隠）れる＝没する」という意味で用いていると考えられる。

「光かくれる」という表現は２『両聖記』の「かの仙洞にひきはなれて、一宇をたてられて、うつり住ましましし所を蔵光庵となつけて、光かくれさせ給し後より、御門徒の尊宿、いにしへのみことのりをたかへす、まもりおこなひ給めり…」という表現に近いが、『両聖記』の記述からは崇光院が蔵光庵において没したという事実は読み取れない。さらに、『両聖記』の記述は「移り住んだところを蔵光庵と名付ける」のが先であって、没することと蔵光庵という名称との因果関係は読み取れない。

２００６年度報告書ではその上で、蔵光庵の名称について仮説を立てた。

①渡唐天神説話は、太宰府天満宮に隣接する光明寺（光明蔵寺）の縁起として作成された可能性が指摘されている。[4]「光明を蔵する寺」というこの意味を考えた時、蔵光庵とは「蔵光明庵」＝「蔵＝光明＝庵（光明を蔵する庵）」の略称である可能性はないだろうか。

②蔵光庵関係の史料を一覧する際、「蔵勝庵」や「蔵拙庵」といった名称も見られ、この流派が「蔵〇庵」という名称を多く用いた可能性がある。[5]

ｂ蔵光庵は大光明寺の塔頭なのか。

先行研究では蔵光庵が大光明寺の塔頭であるかどうかについて説が分かれている。しかしながら両者共に典拠は不明。蔵光庵は大光明寺の塔頭だったのだろうか。[6]

２００６年度報告書では、天龍寺領丹波国弓削庄の年貢について記した文明年間の史料から両者の関係を検討した。大光明寺と蔵光庵は連署をして訴訟を行っており、年貢は大光明寺、蔵光庵共に百貫文ずつ納入されてきている。[7]このように大光明寺と蔵光庵が同等の権利を有する所から、蔵光庵は大光明寺の塔頭ではなかったと考えておきたい。

ｃ蔵光庵の登場しない渡唐天神説話

初期の蔵光庵は渡唐天神説話と切っても切れない関係にある。これまでの渡唐天神説話の初見は応永初年（１３９４）頃成立の『両聖記』である。その内容は蔵光庵住僧が夢想した天神と後に届けられた天神画が同一であったために、蔵光庵に天神を勧請したというものである。

しかしながら、最新の渡唐天神説話の研究成果によれば、渡唐天神説話の初見は嘉暦２年（１３２７）まで遡り、その初見説話には蔵光庵は登場しない。[8]このことは何を意味するのだろうか。蔵光庵という視点から渡唐天神説話を整理し直した。

渡唐天神説話の構造を「類型」によって分類、分析すると、渡唐天神説話は４から５個の定型要素で構成され、必ずしも蔵光庵が登場するとは限らないのである。[9]また、蔵光庵が登場する渡唐天神説話は正確に言えば「蔵光庵夢想天神説話」とでも呼ぶべきものであって、渡唐後の天神については語られても、天神の渡唐自体について語られる内容は含まれない。

さらに、蔵光庵の登場しない渡唐天神説話では、受衣や「衣」が説話の重要なキーワードであるのに対して、「蔵光庵夢想天神説話」では、夢想や「天神画」が説話の重要なキーワードである。これらの「衣」や「天神画」は説話中だけではなく、現実の信仰の場においても重要な役割を果たしていたであろう。

また、成立期ではないが伏見蔵光庵と天皇家・伏見宮家との関わりについては、『看聞日記』を中心に具体像を概観した。『看聞日記』中に見る伏見蔵光庵の記述を項目別にまとめれば以下の通り。（年月日は全て『看聞日記』）

・仏事　　：蔵光庵では先住達の仏事が行われる。応永３０年１１月２０日条（休翁和尚師御房文侍者３３年仏事）、永享６年正月２８日条（休翁和尚２５年忌）

・紅葉　　：蔵光庵は紅葉一覧の場であった。永享４年１０月１４日条。下巻になるとあまり花見の記述が見られないのは貞成が京都に移り住んだ関係であろうか。

・兼任　　：永享５年当時の蔵光庵主無想中訓は、西芳寺住持に任命された。永享５年２月２５日条、同３月１８日条

・葬所　　：足利義教の養子となったものの幼くして死去した常磐井宮が蔵光庵へ葬られた。永享５年３月８日条（頭書）

・文書預置：蔵光庵は伏見宮家の文書を預け置く場であったが、虫損が激しいことや、虫払いをするのが伏見宮家であったことを考えると、管理をしていたとまでは言い切れない。永享５年６月２８日条、同７月１日条

・没後申置：嘉吉元年に東御方が無くなった際、その没後のことを申置かれていたのが蔵光庵である。嘉吉元年５月２７日、同２８日条（頭書）

・庭田家　：庭田重賢亡母の３回忌作善が行われたのが蔵光庵であった。宮家だけに限定されない。嘉吉３年８月２０日条

・位置　　：「近邊紅葉盛之間一覧…退蔵。蔵光庵等歴覧」と記され、伏見仮御所に比較的近かったのであろう。応永３０年１０月１０日条。御所との位置関係については後に触れる。

・作庭　　：蔵光庵主は作庭についての知識を有していたと思われる。「前栽立石等才學之間召之。」応永２５年２月２９日条。他にも応永３２年２月２６日条。応永３２年２月２７日条。

・天神　　：蔵光庵の天神の初見は応永３１年。貞成が天神に出向くのは永享年間が多く、決まって２５日である。明らかに蔵光庵とは区別して書かれており、応永末期には「蔵光庵の天神」として確立していた可能性がある。永享７年正月２５日条には「蔵光天神参。椎野相伴。［覚書］北野へ基祐為御代官参進願書。来廿八日参賀為祈祷也」とあり、北野天神との関わりも記す。

このように、伏見蔵光庵は、生活文化の面でも、年中行事の面でも、伏見宮家とかなり密な繋がりを有していた。ここに列挙しただけでも、さまざまな検討課題を挙げることができるが、さらに伏見蔵光庵のリアリティーを追及するためには、①どこにあったのかという位置の問題、②伏見宮家とどのような接点を持っていたのかという由緒の問題、この２つの点に絞って整理し直すことが重要であろう。

２　蔵光庵資料における位置と由緒の検討

蔵光庵資料における位置の検討

私たちは２００６年度報告書において、蔵光庵の位置についてはその記述がＡ・Ｂ・Ｃと３地点に分散することから「諸説あり位置の推定が出来ていない」とするに留まった。蔵光庵跡地の歴史を辿るためには、この点についてもう一度整理し、スタート地点を明確にする必要があろう。以下、表１「資料に見る蔵光庵・山の天神・桃山天満宮位置の記述」からそれぞれの位置の記述を分析したい。

表１

表１は地誌・絵図・研究において蔵光庵や山の天神・桃山天満宮の位置がどのように記されているのかを整理したものである。その際「桃山天満宮」あるいは「蔵光庵」についての記述が、それぞれどの時期のものに対してなされた記述であったのかに注意を払う必要がある。

桃山天満宮Ｄ（２０・２３・２４・２５・２６）は観音寺町における桃山天満宮の成立について述べたものである。これ以外の桃山天満宮に関する記述＝桃山天満宮Ａ（１７・２２・２４・２５・２６・３０・３２）および、山の天神に関する記述＝山の天神Ａ（８・９・１１・１３・１５・２６・２８）はいずれもその場所をＡとしている。このことは山の天神Ａの桃山天満宮Ｄへの遷座という事実と一致する。

ところが、蔵光庵の位置に関する記述となるとまったく一致しない。Ａ（１２・１４）、Ｂ（８・２９・３２）、Ｃ（１０・２７・２８）と記述が分かれる。なぜだろうか。以下、それぞれの記述の特徴を確認していくこととするが、その際、この蔵光庵の所在地に関するＡ・Ｂ・Ｃをそれぞれ Ａ「蔵光庵松平筑前説」、Ｂ「蔵光庵大光明寺付近・塔頭説」、Ｃ「蔵光庵桃山町三河説」と呼ぶこととする。

Ａ「蔵光庵松平筑前説」

Ａ１２『山城志』は「蔵光廃庵」の位置について、御香宮の東２町の所にあり、『両聖記』の舞台であることを述べる。また「其天満ノ神祠今尚存焉」と記している。

Ａ１４『伏見鑑』は「今の山天神の小詞ハ蔵光庵の鎮守なり」と記す。

１２・１４いずれも直接的表現ではないが、蔵光庵の跡地に「残された」山天神の由緒について述べている。

Ｂ「蔵光庵大光明寺付近・塔頭説」

Ｂ８『山城名勝志』はＡ１４『伏見鑑』と表現が似ているものの、蔵光庵が「隣大光明寺」とする点で決定的に異なる。他の地誌類には蔵光庵が大光明寺付近・隣にあったとする記述は無い。

Ｂ２９「伏見天満宮渡唐天神像拝観記」は、「史書」によれば「蔵光庵はもと大光明寺の隣にあり、貞和年中建立せられ」たとする。貞和年中建立という記述は８『山城名勝志』にしか見られず、また８が蔵光庵の位置について大光明寺の隣と記していることから、２９の言う「史書」とは８『山城名勝志』のことであろう。

Ｂ３２山本眞嗣氏『京・伏見歴史の旅』の蔵光庵に関する記述「臨在禅宗大光明寺の塔頭寺院」も８を典拠とすると思われる。表には載せていないが、３１『五山禅僧伝記集成』にも太虚梵仝が「伏見大光明寺の蔵光庵に住し」たとしており、おそらく蔵光庵を大光明寺塔頭と見ている。これらの点から、蔵光庵の大光明寺付近・塔頭説は８『山城名勝志』の記述から生まれたと推測する。

Ｃ「蔵光庵桃山町三河説」

Ｃについては地誌に記述が無い。２７『伏見叢書』の中で、西野伊之助は蔵光庵についてこう記している。

> 文安ノ伏見山図ニ依レバ月見岡南方ニテ伏見寺石塔ノ北ニ記スヲ見レハ、蔵光庵ハ桃山陵道ヨリ柏原陵ニ達スル間道ノ西方宇治見山南麓ノ地辺ナリトス。而シテ同庵ハ伏見城築城ノ時嵯峨臨川寺ノ東ニ移転セシ時、鎮守ノ天満宮ハ前田候ノ貰受ケテ松平筑前ノ地ニ移シタルモノナリ。（傍点佐々木）

つまり、西野は蔵光庵の位置を「文安ノ伏見山図」によってその場所を宇治見山南方とした。さらに山の天神が松平筑前に「移転」した経緯について伏見城築城の蔵光庵移転時に「鎮守ノ天満宮」を「前田候ノ貰受ケテ松平筑前ノ地ニ移シタ」ためと結論づけたのである。

「文安ノ伏見山図」とは１０「伏見山寺宮（離）近廻地図大概（以下、伏見古図）」のこと。伏見古図の作成意図が中世伏見の姿を描くことには無いことは既に明らかとされている。[10]伏見古図中から蔵光庵を探してみれば、確かに宇治見山南方に描かれている。

また西野の蔵光庵鎮守の天満宮を「前田が貰い受けた」という記述は、伏見古図の示す蔵光庵の場所Ｃと山の天神の存在したＡとのつじつまを合わせるための推測であろう。西

野説（C「蔵光庵桃山町三河説」）に伏見古図以外の根拠は無いのである。

この西野の解釈はそのまま加藤次郎へと引き継がれた。２８『伏見桃山の文化史』の中で加藤は蔵光庵について「宇治見山の南方で桃山御陵道から、桓武陵へ行く道の西北に当るところであつて、寺の鎮守として天満天神が祭つてあつた」と記し、松平筑前「移転」の経緯についても「天満天神は前田利家が天神は前田家の先祖であるといつて、松平筑前の邸内に移して祭つた」と、西野の記述を踏襲した。

「天満天神は前田利家が天神は前田家の先祖であるといつて」という加藤の記述からは、この経緯に関する何らかの史料が存在するかのような印象を受けるが、これは前田家が加賀藩第３代利常の頃、幕府へ提出した「寛永諸家系図伝」で菅原道真を祖とするなど、天神の子孫を称しだしたことからの推測に過ぎないと考える。[11]以上の点からC「蔵光庵桃山町三河説」は伏見古図に「呪縛」された説と言えよう。

以上、蔵光庵の位置についての記述Ａ・Ｂ・Ｃについて検討してきた。Ａ「蔵光庵松平筑前説」は天神が伏見に残されたことは説明しているが、蔵光庵跡地が加賀藩邸となったのかどうか、つまり、松平筑前の土地利用が蔵光庵→加賀藩邸→山の天神と推移したかどうかまでは読み取れない。

Ｂ「蔵光庵大光明寺付近・塔頭説」の蔵光庵が大光明寺の付近・隣であるとする根拠は不明。また、既に中世史料の分析の結果、蔵光庵は大光明寺の塔頭ではないとの結論を得ている。Ｃ「蔵光庵桃山町三河説」の根拠は伏見古図であり、根拠として不適当である。

Ｂ・Ｃは「中世以来ＢまたはＣにあった蔵光庵が、伏見城築城時に嵯峨に移転。ＢまたはＣに残された天神が加賀藩邸内Ａに遷され、伏見城廃城に伴い加賀藩邸跡地に残された天神が山の天神、桃山天満宮となった」という解釈をしなければ成立しない内容であるが、そもそもＢ・ＣからＡへの移転を読み込む必要が無いのである。

Ｂ・Ｃを否定した今、私たちは「中世において蔵光庵がどこにあったのかは不明であるが、①伏見城築城に伴う蔵光庵移転後、天神は伏見に残され、蔵光庵跡地の加賀藩邸内に存在し、②伏見城廃城に伴い加賀藩邸跡地に残された天神が山の天神・桃山天満宮となった」という認識からスタートし直すことが求められる。本稿もこの認識に立って論を進めていく。

蔵光庵資料における由緒の検討

先述の通り、蔵光庵と草創期の蔵光庵と天皇家・伏見宮家との関わりについては明確ではない。そこで、地誌や既往の研究において蔵光庵がどのような由緒を持って語られる寺院であったのかについて検討を試みたい。以下、表２「資料に見る蔵光庵由緒の記述」を元に検討を進めたい。

表２

資料１・３は古文書、２は文献資料、５・６・７・８・１３・１９は江戸時代の地誌、２４・２５・３２は既往の研究が記す蔵光庵の由緒である。

表１から蔵光庵の由緒に関する記述の傾向を大きく捕らえようとすれば、２４『伏見誌』の記述を除き、[12]南北朝時代の持明院統系・伏見宮家との由緒、特に観応の擾乱によって南朝側に捕らえられた三上皇すなわち光厳院・光明院・崇光院との由緒が語られていることがわかる。それではその三上皇との由緒はどのように語られているのか。内容には時代に伴う変化があるのか。現代から時代を遡りながらその由緒を追うこととする。

既往の研究（２５、３２）では、蔵光庵は崇光院との由緒を持って語られる寺院とされてきた。このことについて田中親之は２２『皇室と因縁ある伏見山　桃山沿遷』の中で、津久井清影１９『陵墓一隅抄』の記述にその端を発していると指摘している。津久井は『陵墓一隅抄』成立以前、『聖蹟圖志』（嘉永７年（１８５４）序）の「城劦紀伊郡木幡山及伏見山邊古柏原陵廃址豊公城跡略圖」においても絵図中に「蔵光庵跡　崇光帝崩所」と記している。[13]典拠は不明ながら、津久井は幕末の山陵研究において歴代天皇の陵墓を比定する中で「蔵光庵＝崇光院崩所」説を作り上げたのだろう。

しかし、江戸時代の地誌類によれば、蔵光庵はけして崇光院との由緒のみで語られる寺院ではなかった。１３『山城名跡巡行志』を見ればわかるように、蔵光庵は光厳・光明・崇光の三上皇勅願であったと言う。また、８『山城名勝志』も蔵光庵が光明院の位牌を奉安すると述べる。

中でも黒川道祐による一連の記述（５『日次紀事』、６『嵯峨行程』、７『雍州府志』）は詳細で、５によれば蔵光庵では先の三上皇に加え、後伏見院・貞成親王の法事が行われていたことが知られる。６・７では蔵光庵が光明院の御寺であり位牌を奉安することが述べられる。黒川の記述はいずれも嵯峨蔵光庵について語ったものとしても重要であり、嵯峨移転後の蔵光庵が三上皇を始め、由緒を持つ天皇家の人々の法事を行っていたことが伺える。

以上の点から考えれば、蔵光庵は江戸時代の地誌類の記述から光厳・光明・崇光の三上皇に加え、後伏見院・貞成親王との由緒を持ち、特に光明院の位牌を奉安する「御寺」として語られる寺院であったことが読み取れる。[14]

それではこの位牌はいつから奉安され、近世以前の伏見蔵光庵はどのような天皇家との由緒を有していたのだろうか。

３「伏見蔵光庵替地願」（『大中院文書』１９４）は年未詳ながら蔵光庵の嵯峨移転前後に出された文書で、蔵光庵が光明院の院御所であったという由緒を述べて替地の申請を願い出たものである。３は本稿において重要な史料であり、その成立・内容については後に分析を試みることとし、ここでは以下の点を確認するにとどめる。すなわち、３は中世末期において、蔵光庵と光明院との由緒を当事者（蔵光庵）の側から語った史料であり、中世末期における蔵光庵は特に光明院との由緒を有する寺院であった。

とはいえ、このように当事者によって由緒が語られることと、中世の蔵光庵が真に光明院との由緒を有していたこととは相等ではない。著名な２『両聖記』は天皇家との由緒を記すものの、実は具体的な個人を特定しての記述はなされていない。蔵光庵はいつから光明院との由緒を有していたのだろうか。「位牌」に注目した時、『蔭涼軒日録』には次のような記述がある。

> …大光明寺維那来、前日所論光明院、崇光院御位牌、寺家祠堂所立碑文、光明院尊儀、康暦二年庚申六月廿四日崩、六十歳、崇光院尊儀、応永五年戊寅正月十三日崩、六十五歳、此二之御位牌年月不記之、相尋蔵光庵、則如此答、仍記之、…[15]

足利義政は「帝王之御位牌六ヶ」を東山山荘の東求堂に奉安していた。義政はこれとは別に自筆の位牌を奉安することとしたようで、その候補として「伏見院」「光明院」「崇光院」の名が挙がっている。伏見院の没年は安楽光院からの注進で明らかとなったのだが、光明・崇光については安楽光院にも雲龍院にも位牌が無く、没年が不明であった。そこで位牌を奉安する大光明寺に位牌の「文并年号」を注進することが命じられたのである。

その大光明寺の維那が語るところによると、大光明寺に位牌はあるものの年月を記していないと言う。そこでその年月日を「蔵光庵」に尋ね、義政へ注進するに到ったのである。ここからは蔵光庵は光明院・崇光院の没年を正確に把握していたことが読み取れる。また、位牌を奉安していたことも推測できるのではないか。

蔵光庵と光明院との由緒がいつからのものであったのか。この問題を検討する際の重要な史料 1「絶海中津書状」を最後に検討する。１は「慈照院文書」に収められ、年未詳、絶海中津（１３３６－１４０５）から「蔵勝庵侍司」に宛てられた書状である。慈照院は「相国寺現存塔頭の一院で足利義政の香火所」である。[16]絶海の書状が慈照院に伝来した経緯は不明だが、『五山禅僧伝記集成』によれば、絶海は明徳３年（１３９２）～、応永４年（１３９７）～、応永８年（１４０１）～の３度相国寺に住し、また応永６年（１３９９）には鹿苑院の塔主も勤めた。[17]

まずは１から読み取れることを確認しよう。

①蔵光庵は光明院の勅願他に異なる寺であり

②「御一期」の後は誰に付属することになっても「我々同門」であって見放すことは無い

③現在は「観庵主」が住んでおり、絶海としてはもっとも「然るべく」思う

④昨日、絶海が観庵主に対面の時、観庵主は再三辞退したが最終的には「御領承」された

⑤このことについては明日、絶海が「蔵勝庵侍司」を訪ねて重ねて申し上げる

①からは、今まで見てきた通り、絶海の時代にも蔵光庵が光明院との由緒を有する寺院であったことが読み取れる。それでは本書状が記されたのはいつなのか。人物関係を整理しながら本文書の内容を理解することを通して成立時期を検討したい。

③④に見える、現在蔵光庵に住んでいる「観庵主」とは「休翁普貫（観）」であろう。『看聞日記』にも蔵光庵先住、休翁和尚の仏事が記されている。そして２『両聖記』の成立時の蔵光庵住持「幽琳主翁」こそが、この「休翁普貫（観）」＝「観庵主」である。

さて、絶海は②「御一期」の後の蔵光庵の付属について、蔵光庵に現住の観庵主の了承を得た点について「蔵勝庵侍司」に報告しているわけであるから、蔵勝庵侍司はこの問題の当事者で「御一期」の近い人物であろう。それではこの「蔵勝庵侍司」は誰か。

『大日本史料』は本文書を「山城伏見蔵光庵主普観休翁寂ス」の関係史料に掲載しており、「蔵勝庵侍司」を「善幢カ」としている。[18]善幢とは海印善幢のこと。蔵光庵の初代住持で、休翁の師であり、３１『五山禅林伝記集成』によれば「夢窓疎石の会下に転じ、遂にその法を嗣ぐ。西芳寺・宇治蔵勝庵・伏見蔵光庵に住し」たという。[19]

このように、本書状では蔵光庵の付属が問題となっており、蔵光庵の初代住持は海印、次には休翁が住している点、さらに海印が蔵勝庵に住することがあった点、以上から絶海が書状を宛てた「蔵勝庵侍司」は海印善幢で間違いなかろう。とするならば、海印の没年は明徳２年（１３９１）１１月２０日であり、[20]本書状はまさにその直前の１０月１１日

に出されたことになる。

以上、１「絶海中津書状」の成立および内容を検討してきた。本書状の成立は１３９１年であり、海印亡き後の「光明院勅願」蔵光庵が休翁に付属されることとなる経緯が記されているわけである。

ところで、光明院が崩じたのは康暦２年（１３８０）。「絶海中津書状」成立のわずか１１年前であり、本書状は蔵光庵と光明院の由緒について記された「同時代史料」と言えよう。このことを光明院との由緒を語る蔵光庵の歴史の中に位置づけるならば、蔵光庵はその成立当初から光明院との由緒（勅願寺。ただし院御所であったのかどうかまでは確認できないが）を有し、嵯峨移転後もその由緒から光明院を始めとする持明院統系の天皇の法要を行っていた寺院であると言えよう。

３　蔵光庵「跡地」の歴史　－移るものと残るもの－

２章で行った位置の記述の検討からＢ「蔵光庵大光明寺付近・塔頭説」、　伏見古図によるＣ「蔵光庵桃山町三河説」は否定された。そのことは伏見蔵光庵が成立以来松平筑前にあったことを意味しない。しかし、少なくとも先の検討により蔵光庵を正しく通史的に整理することが可能となったのである。

以降、本稿では「松平筑前の歴史」を紐解くことを中心に蔵光庵の通史的理解を深めようと思うが、その際「移転先」に注目するのと同時に、移転に伴ってその「跡地」がどうなっていくのか、「跡地の歴史」を重視して検討を行っていきたい。

２章の検討からも松平筑前の歴史を紐解く鍵を握るのが、①秀吉による伏見城築城とそれに伴う蔵光庵の移転とその跡地、②伏見城廃城とそれに伴う加賀藩邸の移転とその跡地という、伏見城の築城・廃城に関連する２度の移転・跡地問題であることは確実である。

そこで蔵光庵・山の天神・桃山天満宮等のそれぞれの所在地と移転・成立について整理したものが表３「蔵光庵・山の天神・桃山天満宮・成滝稲荷社の所在地および移転・成立」である。以下、表３から蔵光庵跡地の歴史を検討していく。

表３

表３から移転先と跡地とに注目した時のポイントは以下の通り。

a 嵯峨移転後の蔵光庵のその後

b 加賀藩邸「跡地」の天神

c 天神の観音寺町遷座

d 山の天神「跡地」の成滝稲荷社

e 蔵光庵嵯峨移転前後の経緯

f 松平筑前における「天神」の信仰

①蔵光庵の移転先、嵯峨でのその後の歴史を考えることの重要性については、蔵光庵の由緒の分析からも明らかである。嵯峨蔵光庵は光明院をはじめとする持明院統系の天皇家との由緒を持ち続けていた。そこでまずは、嵯峨に移転した蔵光庵がその後どうなったのかについて現段階での成果を述べておく。

ａ嵯峨蔵光庵のその後

時期は不明ながら嵯峨へと移転し天龍寺末となった蔵光庵について文献上で語られるのは、１７世紀後半、黒川道祐の著述を待たねばならない。先述のように黒川は、蔵光庵が嵯峨移転後も、光明院の由緒を持つ寺院であり続けたことを書き留めてくれた。蔵光庵は嵯峨移転後も、おそらくは中世伏見においても光明院の位牌を奉安し、年忌供養を行い続けていたのである。

ところで、蔵光庵が嵯峨のどこに移転したのかという点についての地誌の記述は一様ではない。以下、表４「資料に見る蔵光庵の所在地と移転先」を見ながら整理を試みる。

表４

表４からは蔵光庵の所在地・移転先の記述が大きく２つに分かれることが読み取れる。「天龍寺塔頭である」と記すものと「臨川寺東に移転した」と記すものである。それではどちらかが間違っているのかというとそうではない。概ね「嵯峨蔵光庵」について記したものはその所属を天龍寺末・塔頭とし、「伏見蔵光庵」について述べたものはその移転先の場所を臨川寺東としているようである。

しかし、蔵光庵は現在天龍寺塔頭としても、臨川寺の東にも存在していない。それでは、いつまではその姿を確認できるのだろうか。天龍寺では明治期に大規模な塔頭の統廃合がなされたと言われる。[21]嵯峨蔵光庵もこの時に無くなった可能性が高い。なお、「天龍寺文書」には中世末から近世にかけての蔵光庵に関する文書が散見する。

現在判っている限りで蔵光庵の記述が見られる「天龍寺文書」を指摘しておく。（番号は「天龍寺文書」のもの）

①　３９１　天正１４年（１５８６）７月２１日　諸塔頭連署衆評定条々

②　５６５　天正１４年（１５８６）６月１７日　天龍寺諸塔頭役員連署定分

③　７２４　寛永１３年（１６３６）２月１８日　蔵光庵替地に付天龍寺衆評定書并絵図

④　７２５　寛文１０年（１６７０）１２月１０日　蔵光庵地替証文

⑤　７２６　寛文１０年（１６７０）１２月１５日　造道カノ庄左衛門畠地請証文（切紙）

⑥１３７５　延享　３年（１７４６）２月日　城州石田村実境庵地替絵図裏書之写

また、未見だが以下の文書にも蔵光庵が確認できる。[22]（番号はいずれも「天龍寺文書」のもの）

⑦　４２３　安永　９年（１７８０）地替証文内に寿寧院西隣蔵光庵役人小林次左衛門

⑧１２９２　天正２０年（１５９２）正月１９日　壁書内の天龍寺塔頭の番編成に蔵光庵

①や②などからは、天龍寺と蔵光庵との本末関係が中世末には形成されていたことが窺えるが、この時既に蔵光庵が嵯峨に移転していたとは考えていない。この点については後述する。また、③には、嵯峨移転後の蔵光庵の境内図が記されており、近世嵯峨における蔵光庵の位置は復元的に研究できる可能性が高い。⑦にあるように、安永年間においても蔵光庵は嵯峨に存在し、地誌では文久３年（１８６３）１８『華洛羽津根』まで天龍寺塔頭としての姿を確認できる。

これらの「天龍寺文書」に見られる天龍寺と嵯峨蔵光庵との関係については、内容の検討も不十分であるから今後の課題としたい。

ｂ加賀藩邸「跡地」における山の天神の成立

２章において蔵光庵の位置に関する地誌や先行研究の記述を検討した結果からは、蔵光庵が伏見城築城を契機として嵯峨へと移転したこと、蔵光庵の「跡地」に注目すれば、その場は蔵光庵→加賀藩邸と移り変わったことがわかっている。つまり、元和９年（１６２３）の伏見城廃城＝加賀藩邸の移転に伴い、その跡地には天神が残されたであろうことが推測される。ここでは、江戸時代の地誌の記述を通して、山の天神と加賀藩邸との由緒や山の天神の具体像がどのように語られるのかを検討していきたい。

正徳元年（１７１１）の９『山州名跡志』は、伏見の「天神宮」について詳細な記述を残している。天神宮が御香宮から東に一町ばかり離れた林中にあること、鳥居の形態や宮の向き、神木像を安置すること、「応永１６年６月１日」という宮再興の記板が宮内にあったことも記す。しかし、ここでは加賀藩邸との関係は述べられていない。

天神と加賀藩邸との関係が地誌の記述から確認されるのは享保１３年（１７２８）まで時代が下る。１１『伏見大概記』の記述は「肥前屋敷天満宮」についてであり、「東西３０間南北２３間」（東西５５ｍ×南北４２ｍ）というその境内域や「宮守奥田左門」の存在まで記す。地元伏見の地誌だけあって９「山州名跡志」よりもさらに詳細な記述である。

「肥前屋敷」という呼称は、前田家の２代利長・３代利常が「肥前守」であったことからの呼称であろう。ここから、この「天満宮」が「加賀藩邸（＝肥前屋敷）」に存在した由緒を持って「肥前屋敷天満宮」と呼ばれ、かなりの規模の境内域を持ち、宮守も存在したことが知られる。もちろんこの境内域が加賀藩邸当時にも同様の規模であったかどうかはわからない。

１４『伏見鑑』や１５『拾遺都名所図会』に到ると「山（の）天神」という俗称も記さ

れる。さらに１５によれば、天神はこの頃既に「桃山天満宮」という名称で呼ばれており、例祭が６月２５日であったと言う。

なお、１５の桃山天満宮が「龍雲寺の西」にあるという記述について補足をしておく。現在の龍雲寺は松平筑前北の一段と高い台地上にある。松平筑前に存在した加賀藩邸や山の天神との位置関係を説明するならば「南北」が正しい。なぜ、「東西」で説明されているのか。実は龍雲寺が現在地に移転してきたのは、明治２７年（１８９４）、「このあたり一帯が天皇御料地として買い上げられた」ためであり、「同３１年、現在地へ寺地を移した」という（３２『京・伏見歴史の旅』）。

それ以前の龍雲寺については、同じく１５が「宇治見山龍雲寺」について以下のように記す。

> 城山の内字三河屋敷にあり。天台宗にして本尊観世音ハ常憲院殿の御念持仏にして石川備中守拝領し當寺に安置す。此寺初ハ敦賀町にあり。正徳年中珍興和尚中興して此寺をひらく所なり。大師堂佛殿乃東にあり。元正大師自作の像を安置す。[23]

龍雲寺は伏見内で現在までに３度の移転をした寺院で、１５『拾遺都名所図会』成立当時は「城山の内字三河屋敷」にあった。[24]図２「『拾遺都名所図会』「宇治見山龍雲寺」と松平筑前周辺の対象図」を見てみよう。

図２

図２からは、１５成立当時の松平筑前と龍雲寺との位置関係がほぼ「東西」であったと言える。

以上のように松平筑前の天神は、加賀藩邸内にあった由緒から「肥前屋敷天満宮」あるいは山の天神と呼ばれ、宮や鳥居・境内を持ち、宮守がいて例祭まで行われる独立した神社であった。この状況は少なくとも１８世紀後半までは続いたであろう。しかしこの後、いつの頃にか山の天神は廃れてしまったと考えられる。次に、天保１２年（１８４１）の遷座以降、観音寺町に桃山天満宮が造営される経緯、およびその後の松平筑前の跡地の歴史について見ていくことにしよう。

ｃ山の天神の観音寺町遷座

観音寺町に桃山天満宮が遷座することおよびその後の経緯については、２１「桃山天満宮石碑」に詳細な記述がなされている。

①１９世紀前半

観音寺住職山本教学と工匠阪田岩次郎は荒廃した天神の再興を思い立ち、本谷市造の援助を受け工事開始。

②天保１２年（１８４１）

２０年の年月を経て天神が再興。

③明治３５年（１９０２）

年月を経る中で破損したため、社掌矢野弟一郎が有志の人々と社務所、社標、玉垣等を新設。江戸期に観音寺復興に尽力した工匠阪田岩次郎の子息、忠兵衛が石碑を作成した。

さらに、現在地御香宮境内に遷座する経緯については、３２『京・伏見歴史の旅』が「交通量が多く、社殿の維持が危ぶまれる状態になったので、昭和４４年（１９６９）１１月、御香宮境内に遷座することになった」と記している。

桃山天満宮はこのように松平筑前の地を離れ、現在地の御香宮境内に遷座するに到った。一点重要な問題を挙げておく。２９「伏見天満宮渡唐天神拝観記」は観音寺町遷座時の桃山天満宮の渡唐天神拝観記であるが、村田氏の記述からは桃山天満宮が当時御香宮の「境外摂社」であったことがわかる。[25]桃山天満宮がなぜ御香宮境内に遷座したのか、両社はいかなる関係を、いつから有していたのかという点は今後の課題であろう。この点は嵯峨に移転した蔵光庵と天龍寺との関係においても同様である。

さてそれでは、桃山天満宮の観音寺町への移転後、その「跡地」松平筑前はどうなったのだろうか。

ｄ山の天神「跡地」における成滝稲荷社の成立

近現代の伏見について事細かに記した書がある。それが加藤次郎２８『伏見桃山の文化史』である。

地誌や先行研究に加え、自らの見聞（聞き書きも含むであろう）を踏まえてなされた加藤の記述は、先述の通り中世伏見に関する記述には一部注意を払う必要があり、一つ一つ典拠を記していないことが難点であるとはいえ、他の資料には見られない内容を記し、大

変興味深い。近現代の伏見について検討する上では踏まえなければならない資料であり、同時代資料であろうことを考えれば信用に値すると考える。

加藤は２８で、山の天神について以下のように記す。

①山の天神の場所は「大手筋国鉄踏切の３０メートル程東方北側に苔清水という有名な井戸があつて、その北方背面」である。

②「敷地は東西２２間（４０ｍ）南北２５間（４５ｍ）で、本社は東西８尺９寸（２.７ｍ）南北７尺７寸（２.３ｍ）檜皮葺であつて、拝殿は瓦葺２間に２間のもの、石鳥居は高さ７尺７寸であつた。手水も１間に４尺瓦葺」

③「附近に末社として白太夫社と称し、現在真福寺にある妙見菩薩を祀つた１間に２間の瓦葺本堂もあつた。本社の西方に１間に１間半の弁天社と成瀧稲荷社と称する瓦葺の小社もあつた」

④「神主居宅として間口２間半（４.５ｍ）桁行５間半（１０ｍ）の茅葺があつたが、神主は一定せず元禄の頃は奥村右京、安永の頃には本島主殿、天明の頃には僧中祥であつた」

①の苔清水については加藤２８以前にも２６『紀伊郡堀内村地名・町名・名勝・史蹟の沿革』が「伏見七井ノ一苔清水」について「山の天神の下にあり。現時、木本久兵衛氏宅、宅地の清水これなり」と記す。現在ではこの苔清水の痕跡は付近に残っていない。この苔清水や山の天神の位置の記述については後に検討する。

②の境内地をはじめとする記述がいつのものついてであるのかは不明である。加藤は明治３４年（１９０１）の生まれであるというから、既に桃山天満宮は観音寺町に遷座した後である。[26]②の詳細な記述からは加藤が何らかの記録を元に山の天神について記した可能性を感じる。

同様に④の神主の記述についても、山の天神についての何らかの記録が存在したのではないかと感じさせる。元禄の頃（元禄年間１６８８～１７０３）の「奥村右京」は、先に見た享保１３年（１７２８）１１『伏見大概記』に記された「奥田左門」のことであろうか。残りの２名、安永の本島主殿、天明の僧中祥については伏見のものも含め地誌類には記述が見当たらない。

⑤末社についての記述では、白太夫、弁天、成滝稲荷の存在を指摘。大正７年（１９１８）刊行の２３『旧都巡遊記稿』は「桃山天満宮」の項で、「末社に老松社・弁財天・白髪社及び稲荷社等あり」と記す。観音寺町当時の桃山天満宮についての記述であるが、これらの末社は山の天神当時からも末社だった可能性が高い。そして、この稲荷社が成滝稲

荷社として桃山天満宮の観音寺町遷座後、松平筑前の跡地に存在し続けることになる。成滝稲荷社について加藤の記述をまとめれば、

①明治２年（１８６９）には社守本谷市兵衛。

②明治２０年（１８８７）頃小泉伊之助がこの社を守り、

③昭和１９年（１９４４）頃まで御堂が残っていたと言う。

④また、その敷地について「東西６間半（１２ｍ）、南北８間３分（１４.５ｍ）５４坪」、

⑤社殿について「東向で東西４尺２寸（１.３ｍ）・南北２尺５寸（７６cm）あり、その周囲９尺（２.７ｍ）４面の玉垣」もあったと言う。

⑥さらに「この附近は伏見の本谷市兵衛の年貢地」であり、

⑦「明治９年（１８７６）土地台帳が出来た頃、松平筑前１９番地宅地５０坪と変つて、本谷市兵衛の所有物であつたのを、小泉伊之助はこの土地と共に買つて小さな家を建て自ら成滝稲荷社々守」となった。

これ以上加藤の記述には踏み込まないが、今後は加藤の記述を踏まえた上で、土地台帳等の確認も含め近現代における松平筑前の土地利用について、松平筑前に住んだ人々について意識しながらの調査を行えば、よりはっきりとした位置関係がわかってくるだろう。（本谷市兵衛と、かつて天保期に桃山天満宮の造営を援助した本谷市造との関係など）

松平筑前の跡地の歴史を追う上で重要なのは、山の天神の末社成滝稲荷社が桃山天満宮の観音寺町遷座以降、松平筑前の地に敷地や社殿・玉垣を有する神社として「独立」しているという点であろう。そして成滝稲荷社の歴史はごく最近まで松平筑前の地に確認することができたのである。

ここで加藤２８の記述および２６を踏まえ、それぞれの時代（Ａ加賀藩邸時代Ｂ山の天神時代Ｃ成滝稲荷社時代Ｄ現在）における加賀藩邸や山の天神・成滝稲荷社・苔清水の位置関係について整理した図３「松平筑前時代別概念図①」、図４「同②」を以下に示す。

図３

図４

以上、３章および４章では蔵光庵跡地の松平筑前の歴史を紐解いてきた。私たちは松平筑前の歴史について、現在から加賀藩邸時代までは遡ることができた。それでは加賀藩邸以前の松平筑前の歴史はどのようなものであったのか。中世において伏見蔵光庵はどこにあったのか。最後にその点を検討しよう。

４　「跡地」の歴史から考える伏見蔵光庵と「天神」

ｅ蔵光庵嵯峨移転前後の経緯　「伏見蔵光庵替地願」から

２章で述べた①伏見城築城②伏見城廃城前後のことは地誌類には記されていない。その代わりその伏見城築城・廃城前後の伏見蔵光庵に関わる重要な文書が存在する。３「伏見蔵光庵替地願」『大中院文書』１９４（以下「蔵光庵替地願」とする）がそれである。

この文書は先述の通り、蔵光庵について光明院の院御所であったという由緒を語る点で重要なのはもちろんのこと、「伏見蔵光庵敷地」の替地を望んだ経緯を記す点が大変重要である。おそらく蔵光庵の人物であろう秀備が、松田勝右衛門尉に宛てて書いたこの文書の年号は不明。[27]校訂者により「関白様」は「豊臣秀吉」のことと注記されている。

「蔵光庵替地願」はこれまで「伏見城築城」時に移転したとされてきた蔵光庵側からの史料と言うことになる。また、従来「蔵光庵は伏見城築城に伴い秀吉が嵯峨に移した」と語られてきたが、実際は強制的に敷地が召し上げられ、建物自体も「壊申」した後に「替地」を申請しており、その申請のために蔵光庵の由緒を述べるという詳細な経緯が知られる。蔵光庵移転は決して簡単に行われた問題ではなかったのだ。

そもそも、蔵光庵移転はこの願いが功を奏した結果だったかどうかもわからない。蔵光庵は「替地」の申請をしてはいるが具体的に「どこに」ということは述べていない。わざわざ伏見を遠く離れた嵯峨の地に「替地」を申請するだろうか。また、蔵光庵は結果的に「天龍寺の塔頭」という形で移転した。

蔵光庵が移ることになる天龍寺はもともと光厳院・光明院との由緒を持ち、蔵光庵主は蔵勝庵を始め西芳寺の住持を兼ねるなど、京都西方に一つの拠点を持っていた。中世後期における蔵光庵主と天龍寺との関係を検討していく中で、蔵光庵が嵯峨へ移転することになる理由が見えてくるかもしれない。

さて、文書発給の年がわからない以上、正確な嵯峨移転の時期も不明なままである。当時の経緯を知る手がかりは何かないだろうか。光明院との由緒に気を取られあまり注目してこなかったが、ここで「関白様御屋敷に被召置候間」という言葉の意味について考えてみたい。

この文言をなんとなく「秀吉が伏見城築城時に武家屋敷造営のため召し上げた」と解釈してはならないと考える。蔵光庵敷地はあくまで「関白様御屋敷」を目的として召し上げられたのであり、関白が秀吉であるならば彼は伏見城下に「御屋敷」を持つ必要性が無い

のではないか。

さらに言えば、秀吉期の「伏見城」は文禄元年（１５９２）に指月の岡に築城された「指月城」と、文禄６年（１５９７）木幡山に築城された木幡山城に大きく分けられるが、秀吉は文禄元年以前既に関白職に無いのである。２度の伏見城築城および大名屋敷造営、そして当時の関白について整理する必要がある。[28]以下の番号は表５【「伏見蔵光庵替地願」の成立時期】と対応する。

表５

秀次の関白就任は①天正１９年（１５９１）１２月。[29]指月城の縄張開始が②翌文禄元年８月。[30]秀吉は当初隠居所として指月城を築き始め、関白職を秀次に譲る以前から指月城築城の準備を始めてはいない。つまり、蔵光庵が敷地を召し上げられ、建物も「壊申」したのは①以後のことであり、ここから先に見た「蔵光庵替地願」の「関白様」は秀次のことであると考えられる。

それでは文書の成立時期はいつだろうか。秀吉は関白職を秀次から召し上げて以降関白をおかず自身は太閤であり続けたから、本文書の成立は秀次関白在任中の①天正１９年以降⑤文禄４年（１５９５）以前である。遅くとも④文禄３年の第２期伏見城普請開始の前後には出されているはずである。

蔵光庵は「伏見城築城に伴い嵯峨に移転」と言うだけでは不正確で、「指月伏見城築城の際、関白秀次の屋敷地となるために召し置かれ、後に嵯峨に移って天龍寺塔頭となった」とするのが正しい。

以上、「蔵光庵替地願」の成立時期について検討を加えてきた。その結果、蔵光庵跡地は関白秀次の屋敷となったことが明らかとなった。ならば、後に加賀藩邸内に祀られることになる蔵光庵天神も一時期秀次屋敷内に祀られた可能性がある。実はこのことを既に知っていた研究者がいた。城郭研究家桜井成広氏である。

桜井氏は『豊臣秀吉の居城　聚楽第・伏見城編』の中で一つの図を提示している。「指月の岡推定復元縄張図」と題されたその図は桜井氏の制作によるもので、指月城の縄張図としては唯一のものかと思われる。もちろん中心に描かれているのは、指月の岡に作られた指月城の縄張になるのだが、その周辺にいくつかの大名屋敷も配されている。そして、その中に「山の天神」が「関白豊臣秀次邸」と同一敷地内に描かれているのである。

この典拠資料はおそらく４『村井重頼覚書』（『加賀藩史料』）であろう。「伏見之御屋形を大納言様へ太閤様被進」として、文禄４年に関白秀次の「伏見之御屋形」が大納言

前田利家に太閤秀吉から寄進されたことが記される。同趣旨の記述は『国祖遺言』、『菅利家卿語話』にも見られる。前田利家の言行録としては『亜相公御夜話』、『利家譜伝録』などが挙げられるが、これらの言行録の書誌学的研究は今後の課題であるようだ。[31]

さて、村井重頼は前田家宿老村井長頼の子で、文禄４年（１５９５）に利家の小姓となった人物である。[32]史料批判は不十分ではあるが、まさに文禄４年当時に利家の小姓を勤めたという村井重頼の記述が正しければ、松平筑前の歴史について次のことが言えることになる。表６「松平筑前土地利用の変遷」を見ながら検討したい。

表６

近世　　：山の天神は松平筑前に存在し、かつての加賀藩邸跡地にあった。

徳川初期：４『村井重頼覚書』によると、その加賀藩邸は秀次屋敷の跡地であった。

豊臣期　：３「蔵光庵替地願」によると、秀次屋敷は伏見蔵光庵の跡地であった。

中世末期：嵯峨に移転する以前の伏見蔵光庵は松平筑前に存在していた

もちろん、蔵光庵が成立以降に伏見内で移転した可能性についても検討の必要があるが、以上を踏まえた上で、現段階では蔵光庵および松平筑前の歴史について次のように考えておきたい。

蔵光庵は松平筑前の地に成立し、伏見城築城まで同地に存在し続けた。関白秀次の屋敷地として蔵光庵敷地は召し上げられ、蔵光庵は後に嵯峨に移転。秀次失脚後屋敷地を前田利家が貰い受け加賀藩邸となる。しかし、伏見城廃城時の加賀藩邸移転に伴い、松平筑前には天神が残った。天神は山の天神と俗称され独立した神社であり続けたが、荒廃から天保１２年に観音寺町に遷座。さらに現在地、御香宮境内へと移る。山の天神跡地には末社であった成滝稲荷社が独立し、ごく最近までその痕跡を留めていた。

松平筑前における聖跡は、姿形を変え存在し続け、簡単には失われなかったのである。

ｆ松平筑前における「天神」の信仰

それでは最後に、蔵光庵「跡地」の歴史における「天神」の意味について考えておきたい。現在でこそ桃山天満宮は御香宮境内に座しているが、その前の観音寺町への遷座も１５０年ほど前のことに過ぎず、それまでのおよそ５００年間、蔵光庵天神としてあるいは山の天神として、「天神」は松平筑前の地にあり続けた。

ところで、本稿では蔵光庵天神について、屋敷内に勧請され祀られる神であって、ある時は蔵光庵に、ある時は加賀藩邸に付属するものとして捉えてきた。しかし、天神が蔵光

庵や加賀藩邸の移転後も２５０年近く松平筑前の跡地に山の天神として残り続けたことを考える時、この「天神」こそが、松平筑前における信仰の核だったとは考えられないだろうか。

『両聖記』は、蔵光庵永代の土地神として天神を勧請したと記す。原田正俊氏によると臨済宗法燈派の在地展開の方法は、「神祇が禅僧に聞法するとか、託宣により擁護を約束するという形をとっている。その結果、関係する禅院内に神が勧請され、伽藍擁護の土地神とされる」と言う。[33]

この意味で、『両聖記』は禅僧による神祇の教化済度という渡唐天神説話であり、在地神「天神」と外来仏教「蔵光庵」との神仏習合説話でもあると捉えることができる。

蔵光庵成立以前、そこには既に「天神」の信仰があり、後発の蔵光庵はそれを取り込むべく説話を形成した。前田家と天神との説話的な関わりも、あるいは蔵光庵天神との出会いが始まりだったかもしれない。

このように、蔵光庵移転後も「天神」が松平筑前の跡地に残り続けたことの意味を考えた時、山の天神が観音寺町に遷座した後に成滝稲荷社が松平筑前の跡地に残り続けたことの意味はどのように考えられるだろうか。

蔵光庵→山の天神→成滝稲荷社という土地の歴史を考えれば、ごく最近までの６００年以上に渡って松平筑前は何らかの形で神が祀られる聖地であった。このようには考えられないだろうか。

蔵光庵の「天神（てんじん）」も、実は何らかの「天神（てんしん）」を取り込み、習合した「天神信仰」の姿なのではないかと。８『山城名勝志』の記す「龍幡山」という蔵光庵の山号に併せ、松平筑前にあり続けた伏見七井の１つ苔清水の存在からは、松平筑前の地が「天神（てんじん）」とは異なる聖性を持ち合わせていた可能性を感じさせる。

そして、まさにその聖性の源泉であった苔清水がその姿を無くすと、聖性の象徴としての神祠も松平筑前の地に存在しなくなってしまった。いや、存在する意義を失ってしまったのではないだろうか。筑前台に残る「地蔵」がその聖跡のわずかな名残なのかどうか、もはや知るすべは無い。

おわりに　これからの伏見研究に向けて

本稿では、松平筑前という土地について伏見蔵光庵の移転およびその「跡地」の歴史に注目し、伏見蔵光庵が中世においても松平筑前に存在した可能性を検討した。それでは、本稿におけるこの成果およびそこに到るまでの方法論は、今後の研究にいかなる変化をもたらすであろうか。

１つには、蔵光庵研究・渡唐天神説話研究のさらなる深化へのきっかけとなる点が挙げられる。２９「伏見天満宮渡唐天神拝観記」は、桃山天満宮に収められている渡唐天神像やそこに記された和歌賛について、

> 画様や字体から見てどうしても応永頃の古い時代のものとは考え難く、近世初頭の作のようである。殊にこの花押には見覚えがあるように考えている時、電光のように尊朝法親王であることに気付いた。[34]

としている。この像が中世のものではなく、近世初頭の尊朝法親王【天文２１年（１５５２）－慶長２年（１５９７）】賛であることに対して村田氏は正直に「失望感」を記された。

もちろん、この渡唐天神像がいつから桃山天満宮に奉安されているのかはわからないが、本稿で述べたような中世末から近世初頭にかけての激動の蔵光庵史の中に、尊朝賛の渡唐天神像がどのように位置づけられるのか、気になる点である。

次には、蔵光庵の場所の比定を通して、中世伏見内のそれぞれの寺院、神社、伏見御所等々のものの場所が確定されていくきっかけとなることが考えられる。蔵光庵と並んで中世伏見において大きな存在感を持つ寺院に「退蔵庵」を挙げることができる。

この退蔵庵について１２『山城志』は蔵光庵の北にあったと記す。もちろん、その典拠は慎重に確認されなければならないが、蔵光庵の位置が現筑前台であったならば、その北とはさらに一段と高い台地上、現龍雲寺付近であろうか。蔵光庵跡地同様、退蔵庵跡地にもその後の歴史があるのだ。

このように蔵光庵という寺院の中世における位置の比定は、中世伏見における寺社等の位置の比定に繋がる可能性が高いのである。

また、本稿で用いた「跡地」の歴史に注目する方法論は、寺社等の移転について考察する際に応用可能であるし、特に伏見の歴史を考える時には有効な手段と言える。例えば、

「指月庵」・「大光明寺」・「伏見御所」などについても、その「跡地」の歴史の通史的な理解を通して、中世伏見におけるそれぞれの実像をより理解することができるであろう。そして、このようにポイントポイントを明らかにする作業を通して、私たちは中世伏見の具体的な姿を捉えることができるようになる。

本稿は、そのような各寺社の「跡地」や「御所旧跡」にはその後何が存在したのかという疑問を持って、土地利用の問題を通史的に追う中で中世伏見の姿を描き出す手法の一つの試みである。中世伏見の研究にはまだまだ課題が多いが、『看聞日記』以降の中世の記録・文書や近世の地誌から丹念に資料を収集し、中世の名残を紐解いていくことが必要であると考える。

1　渡唐天神信仰および蔵光庵に関する主な研究・史料としては以下の通り。

・村田正志「渡唐天神思想の源流」（村山修一編『天神信仰』）雄山閣１９８３、初出１９５４

・村田正志「伏見天満宮渡唐天神像拝観記」（『神道及び神道史』７）１９６８

・原田正俊「渡唐天神画像に見る禅宗と室町文化」（『日本中世の禅宗と社会』）吉川弘文館、１９９８、初出１９８７

・原田正俊「禅と天神信仰」（「悠久」９８）鶴岡八幡宮２００４．７

・上田純一「渡唐天神説話の発生をめぐって」（『日本宗教文化史研究』５－１）日本宗教文化史学会２００１

・大塚紀弘「渡唐天神説話源流考　―観音寺所蔵『天神袈裟之記』の紹介を兼ねて－」（『日本宗教文化史研究』９－２）日本宗教文化史学会２００５．１１

・「菅神入宋授衣記」（『群書類従』巻１９）

・「両聖記」（『群書類従』巻１９）

・「天神傳衣記」（『神道大系』神社編１１　北野）

・『碧山日録』長禄３年２月２１～２３日条。他

・『臥雲日件録抜尤』文安３年４月１５日条。文正元年５月７日条。他

2　天神信仰に関する文学・美術・信仰史に関する主な研究としては以下の通り。

・太宰府天満宮文化研究所編『菅原道真と太宰府天満宮』上下　吉川弘文館１９７５．３

・真壁俊信『天神信仰の基礎的研究』日本古典籍註釈研究会１９８４．８

・真壁俊信『天神信仰史の研究』続群書類従完成会１９９４．３

・村山修一『天神御霊信仰』塙書房１９９６．１

・竹内秀雄『天満宮』新装版　吉川弘文館１９９６．５

・今泉淑夫　島尾新編『禅と天神』吉川弘文館２０００．１１

・宮島新一「束帯天神像と渡唐天神像--怨霊神から学芸神へ」（『国文学』６７（４）特集 学問の神様・菅原道真没後１１００年　道真の著述）２００２．４

・今泉淑夫「渡唐天神前後」（『日本歴史』６５２(小特集 菅原道真没後千百年)）２００２．９

・所功「京都における天神信仰の展開」（『京都産業大学日本文化研究所紀要』7/8）２００３．３

・河音能平『天神信仰の成立　日本における古代から中世への移行』塙書房２００３．３

・須賀みほ『天神縁起の系譜』図版篇、研究・資料篇　中央公論美術出版２００４．４

・村山修一『天神信仰』雄山閣２００７．５

・竹居明男『北野天神縁起を読む』吉川弘文館２００８．１１

３　中・近世の伏見・伏見城に関する主な研究としては以下の通り。

・加藤次郎『伏見桃山の文化史』私家版１９５３

・野田只夫「伏見城下町の一考察　ー築城前の伏見と城下町建設」（『京都教育大学　紀要Ａ』№３５別冊）京都教育大学１９６９．９

・横井清『看聞御記「王者」と「衆庶」のはざまにて』そしえて１９７９（後に『室町時代の一皇族の生涯『看聞日記』の世界』講談社２００２）

・足利健亮「伏見城と城下町成立の意味ー宇治川河道の延長と伏見大手筋の関係」（『中近世都市の歴史地理』）地人書房１９８４

・位藤邦生『伏見宮貞成の文学』清文堂１９９１．２

・足利健亮「豊臣秀吉の「首都」作り②伏見城プラン」（『景観から歴史を読む』ＮＨＫライブラリー）ＮＨＫ１９９８

・瀬田勝哉「「伏見古図」の呪縛」（『武蔵大学人文学会雑誌』第３１巻３号)武蔵大学人文学会２０００．５

・山田邦和「伏見城とその城下町の復元」（日本史研究会『豊臣秀吉と京都―聚楽第・御土居と伏見城』文理閣２００１．１２

・瀬田勝哉「伏見即成院の中世」（『武蔵大学人文学会雑誌』第３６巻３号）武蔵大学人文学会２００５．１

４　前掲注１大塚論文。

５　「蔵勝庵」：３１『五山禅僧伝記集成』「海印善幢」の項。「蔵拙庵」：『看聞日記』永享５年３月１８日条。

６　塔頭説　：２８『伏見桃山の文化史』。非塔頭説：３１『五山禅僧伝記集成』、３２『京・伏見歴史の旅』

７　『蔭涼軒日録』文明１７年１２月１６日条。

８　前掲注１大塚論文。

９　上田純一氏は前掲注１の論文で、崇福寺住持としての円爾の活躍を強調する説話を「大宰府型渡唐天神説話」。北野天神の仏鑑禅師参禅の逸話が中心となる説話を「五山型渡唐天神説話」と分類された。これらは「時期的に前後関係を持つ内容の説話であった」と言う。

１０前掲注３瀬田勝哉「「伏見古図」の呪縛」

１１西山郷史「天神として祀られた藩主　ー加賀・能登・越中の天神信仰ー」（『宗教民俗研究』１３）日本

宗教民俗学会　２００３.１２

１２『伏見志』は「宇多帝」が法皇となる以前に蔵光庵が「仮ノ御庵」であったとし、同伴僧「月渓」の夢想について記す。「月渓」の存在からは『伏見志』の記述が『両聖記』に基づくものであることがわかる。『両聖記』は天皇個人を特定しての由緒を語っておらず、菅原道真と宇多天皇との関係（道真の娘が宇多天皇の妻）から『伏見志』が比定を試みたものであろうが誤りである。

１３早稲田大学図書館古典籍データベース

（http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/index.html）で閲覧可能。

１４『日次記事』は蔵光庵に光厳院位牌ありとしているが、他の資料には光厳院の位牌の記述を見ない。

１５『蔭涼軒日録』文明１８年（１４８６）５月６日条。関連史料として同４月２９日・５月２日・４日・７日・２２～２４日条。

１６延徳３年（１４９１）に前年の足利義政死没を受けて大徳院が慈照院と改称して成立した（『国史大辞典』竹貫元勝）。

１７玉村竹二『五山禅僧伝記集成』「絶海中津」の項。

１８『大日本史料』応永１７年２月１日条。第７編１３冊

１９玉村氏の蔵勝庵が宇治にあるという比定には疑問が残る。

２０玉村竹二『五山禅僧伝記集成』「海印善幢」の項。

２１「「天龍寺」の塔頭は時代によって増減した。江戸時代の始めには３１院の塔頭があったが、明治５年（１８７２）には２２院に減じ、現在では境内塔頭として、慈済院・三秀院・松巌寺・妙智院・寿寧院・弘源寺・宝厳寺・永明院・等観院があり、境外には臨川寺、金剛院、宝寿院の計１１院が残っている。」「山城国葛野郡嵯峨天龍寺塔頭臨川寺文書」（国文学研究資料館史料館編『山城国諸家文書目録』その１　１９９６）より抜粋。

２２前掲注２１目録。

２３『拾遺都名所図会』「宇治見山龍雲寺」の項。（『新修京都叢書』臨川書店）

２４ただしこの場合若干の疑問点がある。現桃山町三河付近は確かに御料地となっているが、かつての宇治見山は桃山町三河の北の台地（現桃山町下野）であると考えられ、現在は民間の分譲地となって開発されている。「宇治見山」の「龍雲寺」であるという点からも龍雲寺はこの台地上にあったと考えられる。買い上げられた御料地の範囲等についても今後検討する必要があろうか。なお、万延元年（１８６０）の１７『宇治川両岸一覧』も桃山天満宮について１５とほぼ同文を記す。後述の通り、万延元年当時桃山天満宮は既に観音寺町に遷座している。

２５前掲注１村田「伏見天満宮渡唐天神像拝観記」

２６加藤次郎の年齢の記述は前掲注１６瀬田論文より。

２７松田政行。天文２３年（１５５４）～慶長１１年（１６０６）。京都奉行前田玄以の家臣。京都支配の実務を担当した。『国書人名辞典』岩波書店１９９８．１１

２８山田邦和氏は、「伏見城」をその性質から「四つの時期に分けて理解することができる」とされ、それぞれの時期について城下町の復元を試みられている。同氏「伏見城とその城下町の復元」（日本史研究会『豊臣秀吉と京都―聚楽第・御土居と伏見城』文理閣２００１．１２

２９〔『公卿補任』国史大系５５巻第３篇

３０『兼見卿記』文禄元年８月２０日条

３１佐藤圭氏の論文「利家の言行録」より。雑誌媒体での発表はないが、同氏のホームページ上に掲載されている。（http://www5d.biglobe.ne.jp/~ask/）佐藤氏は朝倉氏の研究者で福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館勤務。

３２前掲注２７佐藤「利家の言行録」

３３前掲注１原田「渡唐天神画像に見る禅宗と室町文化」

３４前掲注１村田「伏見天満宮渡唐天神像拝観記」

図１　資料に見る蔵光庵・山の天神・桃山天満宮の位置

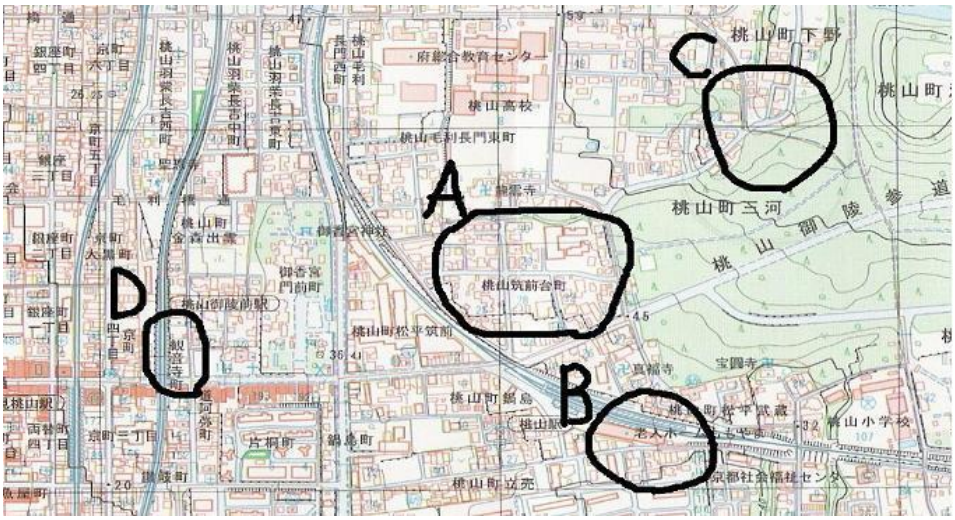


表１　資料に見る蔵光庵・山の天神・桃山天満宮位置の記述（元2006宮澤作成表）

番号	地誌・文献名	記述対象	図１における位置
12	山城志（＝日本輿地通志）	蔵光廃庵	蔵光庵Ａ
14	伏見鑑	蔵光庵	
8	山城名勝志	蔵光庵	蔵光庵Ｂ
29	伏見天満宮渡唐天神像拝観記	蔵光庵	
32	京・伏見歴史の旅（２００３新装）	蔵光庵	
10	伏見山寺宮近廻地図大概	蔵光庵	蔵光庵Ｃ
27	伏見叢書	蔵光庵	
28	伏見桃山の文化史	蔵光庵	
8	山城名勝志	天満社	山の天神Ａ
9	山州名跡志	天神宮	
11	伏見大概記（岡本正氏所蔵本）	肥前屋敷天満宮	
13	山城名跡巡行志	天神社	
15	拾遺都名所図会	桃山天満宮	
26	紀伊郡堀内村地名・町名・名勝・史蹟の沿革	桃山天満宮	
28	伏見桃山の文化史	山の天神	
17	宇治川両岸一覧	桃山天満宮	桃山天満宮Ａ
22	皇室と因縁ある伏見山　桃山沿遷	桃山天満宮又「山の天神」	
24	伏見誌	桃山天満宮	
25	御大禮記念京都府伏見町誌	桃山天満宮	
26	紀伊郡堀内村地名・町名・名勝・史蹟の沿革	桃山天満宮	
30	豊臣秀吉の居城〈聚楽第/伏見城編〉	桃山天満宮	
32	京・伏見歴史の旅（２００３新装）	桃山天満宮	
20	伏見大概記（若林正治氏旧蔵本）	肥前屋敷天満宮	桃山天満宮Ｄ
23	旧都巡遊記稿	桃山天満宮	
24	伏見誌	桃山天満宮	
25	御大禮記念京都府伏見町誌	桃山天満宮	
26	紀伊郡堀内村地名・町名・名勝・史蹟の沿革	桃山天満宮	

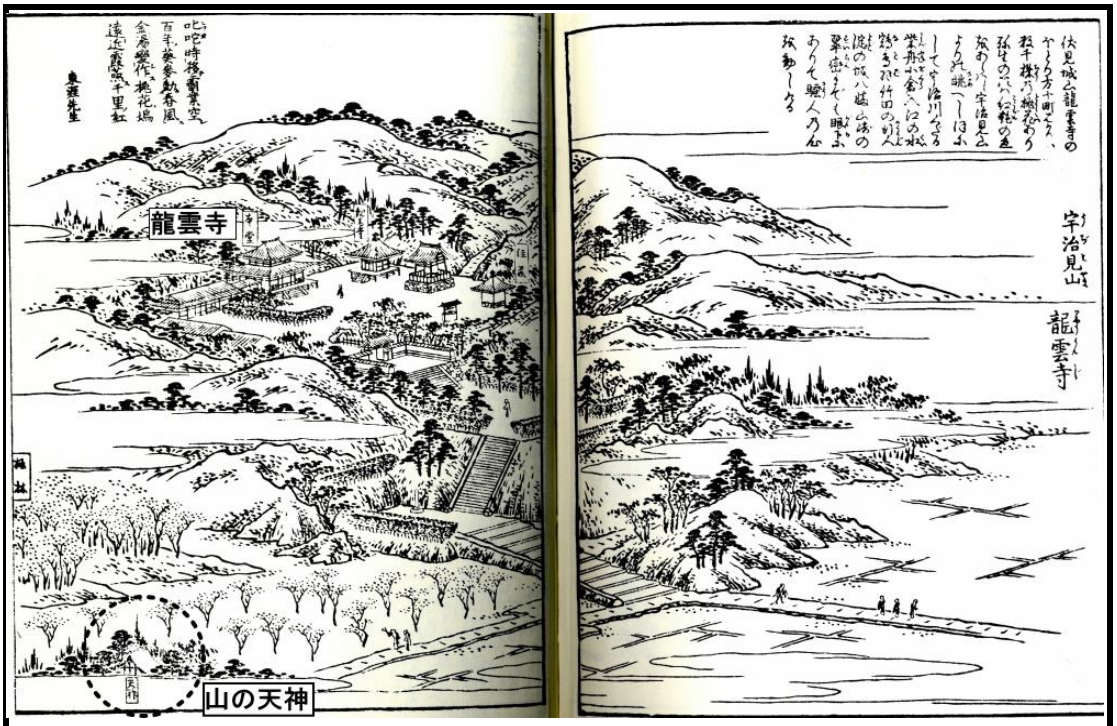
表２　資料に見る蔵光庵由緒の記述

番号	地誌・文献名	成立	記主	記述対象	誰の由緒とするか
1	絶海中津書状	1391カ	絶海中津	蔵光庵	光明院勅願
2	両聖記	1394以降	花山院長親	蔵光庵	不明
3	蔵光庵替地願	1596以降カ	蔵光庵秀備	蔵光庵	光明院院之御所
5	日次紀事	1676	黒川道祐	崇光院ノ御忌	崇光院法事
				後伏見院ノ御忌	後伏見院法事
				光明院ノ御忌	光明院法事
				光厳院ノ御忌	光厳院の位牌
				伏見殿貞成親王忌	貞成親王法事
6	嵯峨行程	1680	黒川道祐	蔵光院	光明帝の御寺
7	雍州府志	1684	黒川道祐	蔵光庵	光明院の位牌
8	山城名勝志	1711	大島武好	天龍寺の蔵光庵	光明院牌を安んず
13	山城名跡巡行志	1754	浄慧	天神社	光厳院、光明院、崇光院三帝勅願之神祠
19	首註陵墓一隅抄	1868	津久井清影	蔵光庵	崇光院崩所？
24	伏見誌	1922	伏見町	桃山天満宮	宇多帝仮ノ御庵
25	御大禮記念京都府伏見町誌	1929	伏見町	崇光天皇崩御の場所	崇光天皇崩御
32	京・伏見歴史の旅（２００３新装）	1991	山本真嗣	蔵光庵	崇光上皇仮ノ御庵・逝去

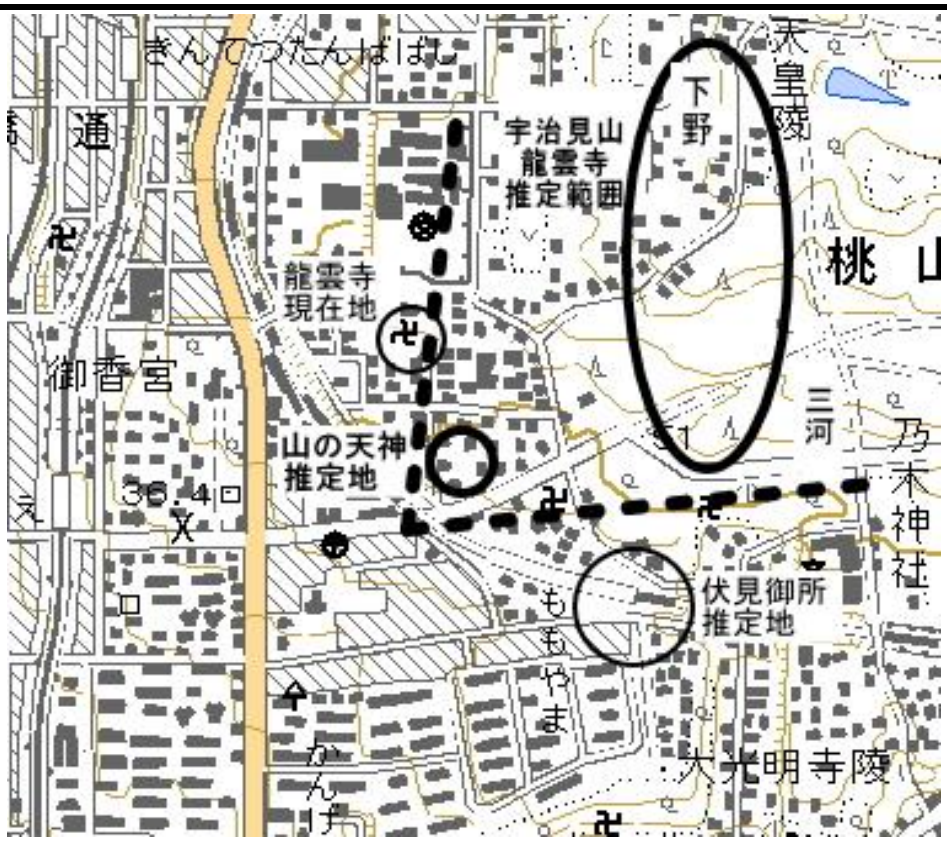
表３　蔵光庵・山の天神・桃山天満宮・成滝稲荷社の所在地および移転・成立

西暦	和暦	内容	松平筑前	観音寺町	御香宮境内	嵯峨	典拠・資料番号
				f			
1391カ		蔵光庵は「光明院勅願異他御事」	蔵光庵				１「絶海中津書状」
1394以降	応永初年	「蔵光庵夢想天神説話」初見	蔵光庵天神				２『両聖記』
１５世紀前半	応永	花見・紅葉の名所					『看聞日記』
	⇩	西芳寺住持を兼任					
	永享	足利義教養子、常盤井宮葬所					
	⇩	伏見宮家文書預置所					
	⇩	東御方葬所					
	嘉吉	庭田重賢の母葬所					
1591	天正１９	秀次関白就任					
1592	文禄元	指月城築城		e			
		蔵光庵敷地「関白様御屋敷」に召し置かれる。替地の申請。光明院院御所という由緒	天神は秀次邸内				３「蔵光庵替地願」
1595	文禄４	前田利家、秀次の伏見屋形をもらいうける	天神、前田家邸内に祭られる？		a		４『村井重頼覚書』
						蔵光庵、嵯峨へ移転	
1623	元和９	伏見城廃城	加賀藩邸の移転＝天神の独立？				
1670～1680	延宝年間	黒川道祐、蔵光庵と光明院との関係を筆録					５『日次記事』６『嵯峨行程』７『雍州府志』
	元禄の頃	神主奥田左門	b				２８『伏見桃山の文化史』
1711	正徳元	天神宮の社殿を確認	山の天神初見				９『山州名跡志』
1728	享保１３	肥前屋敷天満宮として境内域、宮守を記す					１１『伏見大概記』
1754	宝暦４	天神社として記述あり					１３『山城名跡巡行志』
	安永の頃	本島主殿					２８『伏見桃山の文化史』
1780	安永９	山の天神の小詞と記述					１４『伏見鑑』
	天明の頃	僧中祥					２８『伏見桃山の文化史』
1787	天明７	絵画史料上で社殿を確認			c		１５『拾遺都名所図会』
1841	天保１２	観音寺住職教覚により、観音寺町へ遷座		桃山天満宮成立			２１「桃山天満宮石碑」
	幕末～明治	肥前屋敷天満宮が観音寺境内にあることを記す					２０『伏見大概記』
1863	文久３	天龍寺末蔵光庵の地誌における確認限界	d				１８『花洛羽津根』
1869	明治２	成滝稲荷社、社守本谷市兵衛	成滝稲荷社の独立				２８『伏見桃山の文化史』
1887	明治２０	社守小泉伊之助					２８『伏見桃山の文化史』
1906	明治３９	桃山天満宮碑文成る					２１「桃山天満宮碑文」
1922	大正１１	天満は前田家邸宅地					２４『伏見誌』
1929	昭和４４	天満は前田家邸宅地					２５『御大礼記念京都府伏見町誌』
1931	昭和６	天満社所在を伏見七井苔清水（木本久兵衛宅）とする					２６『紀伊郡掘内村地名・町名・名勝・史蹟の沿革』
1944	昭和１９	成滝稲荷社の御堂が残る					２８『伏見桃山の文化史』
	戦後	御堂に大工遠藤が住む					２８『伏見桃山の文化史』
1969	昭和４４	桃山天満宮、御香宮境内に遷座			桃山天満宮現在地に成立		
現在							

図２　『拾遺都名所図会「宇治見山龍雲寺」と松平筑前周辺の対照図



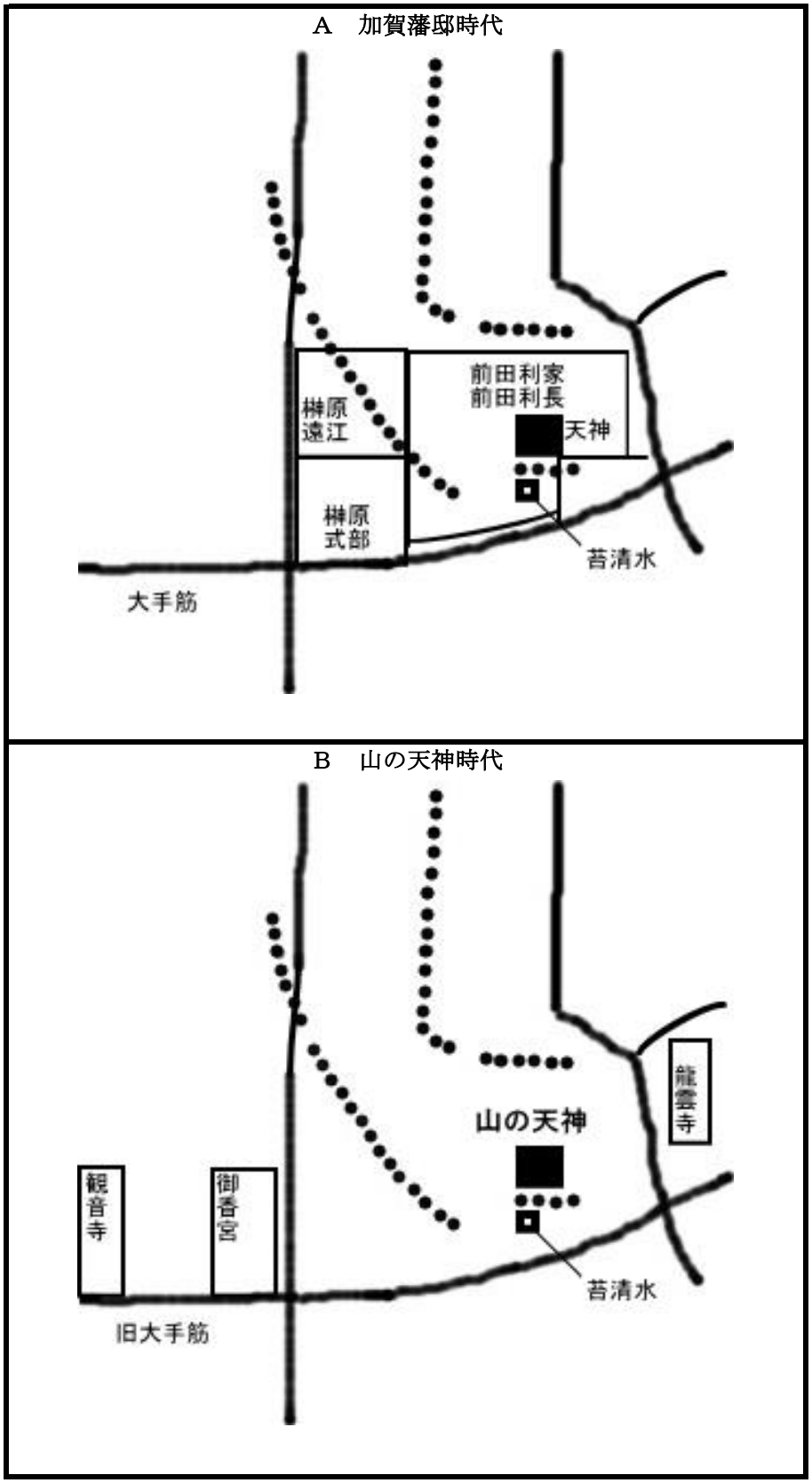
『拾遺都名所図会』「宇治見山龍雲寺」（『新修京都叢書』臨川書店）より作成



点線の範囲が『拾遺都名所図会』における「宇治見山龍雲寺」の絵画範囲

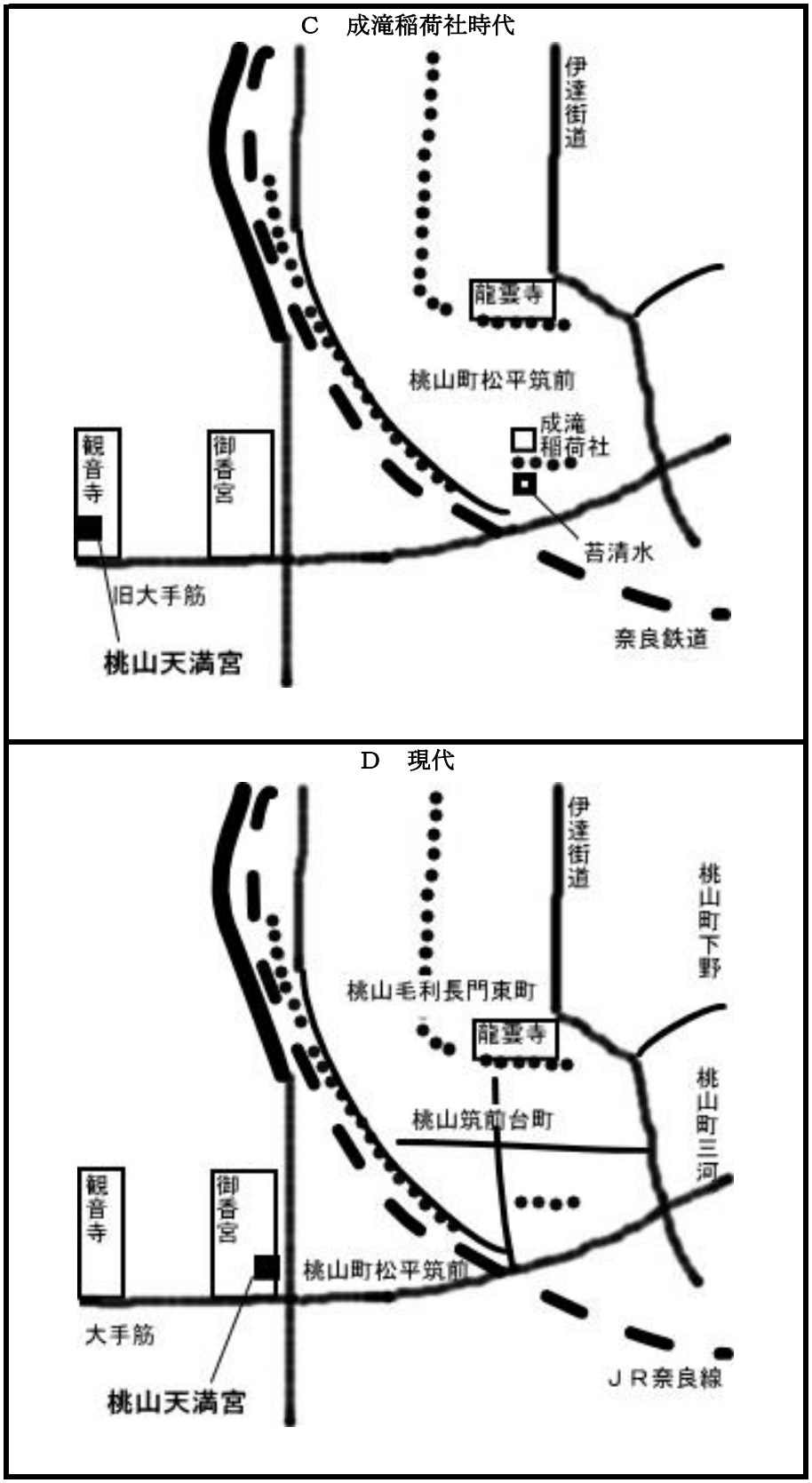
国土地理院　電子国土Webシステム（http://portal.cyberjapan.jp/index.html）より作成

図３　松平筑前時代別概念図①



点は崖を表す。Ａ大名屋敷の配置は本文注３山田論文を参照した。

図４　松平筑前時代別概念図②



点は崖を、傍点は鉄道を表す。

表４　資料に見る蔵光庵移転先・所在の記述

番号	地誌・文献名	成立	所在地／移転先	
			天龍寺	臨川寺
5	日次紀事	1676	天龍寺蔵光庵、天龍寺ノ末寺蔵光庵	
6	嵯峨行程	1680	天龍寺ノ末寺ナルニヨリ、此ノ處ニ移サシム	
7	雍州府志	1684	大井河ノ東邊ニ則為リ天龍寺之末訖	
8	山城名勝志	1711	天龍寺末派	
				遷嵯峨臨川寺東
12	山城志	1734		嵯峨ノ臨川寺界内
13	山城名跡巡行志	1754	嵯峨天龍寺界内	
14	伏見鑑	1780		嵯峨臨川寺の界内
15	拾遺都名所図会	1787		嵯峨臨川寺のひがし
16	洛西嵯峨名所案内記	1852	天龍寺塔頭	
17	宇治川両岸一覧	1860		嵯峨臨川寺のひがし
18	花洛羽津根	1863	霊亀山天龍寺塔中	
25	御大禮記念京都府伏見町誌	1929		嵯峨臨川寺東
27	伏見叢書	1938		嵯峨臨川寺ノ東
28	伏見桃山の文化史	1953		嵯峨臨川寺の東
29	伏見天満宮渡唐天神像拝観記	1968		嵯峨臨川寺の東
30	豊臣秀吉の居城〈聚楽第/伏見城編〉	1971		嵯峨臨川寺東
32	京・伏見歴史の旅（２００３新装）	1991		嵯峨の臨川寺の東

表５　「伏見蔵光庵替地願」の成立時期

時期	和暦（西暦）	月	事項
①	天正１９年（1591）	１２月	豊臣秀次関白就任
②	文禄　元年（1592）	８月	第１期伏見城（指月屋敷）縄張開始
③	文禄　２年（1593）		「伏見蔵光庵替地願」
④	文禄　３年（1594）	正月	第２期伏見城（指月城）普請開始
⑤	文禄　４年（1595）	７月	秀次、高野山へ追放
⑥	文禄　５年（1596）	閏７月	伏見大地震
⑦	同年		第３期伏見城（木幡山城）築城開始

表６　松平筑前土地利用の変遷

時期	建造物	場所	典拠等
中世	伏見蔵光庵	（松平筑前）	
	‖		
中世末	伏見蔵光庵	（松平筑前）	
	‖		伏見蔵光庵替地願
豊臣期	秀次屋敷	（松平筑前）	
	‖		村井重頼覚書
徳川初期	加賀藩邸	松平筑前	江戸時代地誌の由緒
	‖		
近世	山の天神	松平筑前	江戸時代地誌の由緒

３２山本眞嗣『京・伏見歴史の旅』　山川出版社　１９９１

蔵光庵

：崇光上皇が常住の伏見殿を離れて、その北の丘に別御殿を建てて移り住み、応永５年（１３９８）正月、ここで逝去されたが、このとき、天皇が「光」「蔵」れるという意味からここは“蔵光庵”と名づけられ、臨済禅宗大光明寺（現大光明寺陵、指月の森にあった。→p.８５）の塔頭寺院となった。

桃山天満宮

：豊臣秀吉が伏見城の築城にさいし、大光明寺は相国寺（上京区）に、蔵光庵は嵯峨の臨川寺の東に移築されたが、天満宮はそのままこの土地に残された。ちょうどここが前田利家の邸宅地に割り当てられ、かつ前田家が菅原道真を先祖とするところから、とくにこれを崇拝し祀るところとなった。豊臣氏が滅んでまもない元和９年（１６２３）の伏見城廃城後は、そのままに放置され、里人から“山の天神”と俗称されていたことは、江戸時代の古地図などによってもわかる。

時代がくだって天保１２年（１８４１）、観音寺の住職教覚が篤信家本谷市造とともに寄付金をつのり、また阪田岩次郎が献身的に工事にあたり、実に２０余年の歳月を費やして観音寺の南側にりっぱな社殿が完成した。ところが近年、交通量が多く、社殿の維持が危ぶまれる状態になったので、昭和４４年（１９６９）１１月、御香宮境内に遷座することになったのである。

渡したが、木本は実際服部道二十二坪を買収して、六十八坪に家屋を建て服部道は二十二坪しかなくなり、この道路を宅地に地目変換していたから、納税代人の負担は益々重くなつた。…４６２－４６３ｐ

２９村田正志「伏見天満宮渡唐天神像拝観記」（『神道及び神道史』７）１９６８

伏見天満宮

…史書の記すところによると、蔵光庵はもと大光明寺の隣にあり、貞和年中建立せられ、開基は海印善幢である。ところが近世になり、豊臣秀吉がこの地に伏見城を築くことになり、これを嵯峨臨川寺の東に移転した。前述のように伏見天満宮は蔵光庵の鎮守に勧請されたものであるというから、元来同地にあったこと疑いなく、伏見城の構築にあたって動揺を免れなかったと判断される。御香神社発行の桃山天満宮御由緒略記によると、（中略）これがすなわち現今の天満宮で、鎮座地も伏見区観音寺町となっている。ところで、この御由緒略記にしたがうと、天満宮は伏見築城に際して動揺はあったけれども、移転はせず、またその後も荒廃はしたけれども、ともかく存続して今日に至ったことは確かである。しからば応永のはじめ同宮に斎き祀られた渡唐天神像が昭和の今日に伝存すると推定してもよろしいように思われる。この上は同宮の本殿奥深く奉安される天神像を拝観して、これを学問的に確認するより他に方法がないのである。

３０桜井成広『豊臣秀吉の居城（聚楽第/伏見城編）』　日本城郭資料館出版会　１９７１

松平筑前

…その外に三の丸がなかったことは、そのすぐ北が「松平筑前」という地名の台地でその北隣は更に甚だ高い台地で、三の丸を設けても見下されるから明である。松平筑前とは前田利長の事で前田家は関白秀次の旧邸を与えられたのであるからこの本丸北裏の重要な台地は太閤の後継者と定められていた秀次の邸地であったことが分かる。２２２ｐ

桃山天満宮

…初め御香宮の東方二町の地竜雲寺の西方にあった。「拾遺都名所図会」に流造の社殿が写されている。この社は崇光院の崩ぜられた蔵光院に、応永元年沙門月渓が渡唐天神像を授かって祀ったもので、築城に当り蔵光院は嵯峨臨川寺東に移されたが天神はその地（旧秀次邸）を邸とした前田利家（菅原氏）が社殿を造営して祀ったので後世まで山ノ天神といって残り、天保十二年に御香宮の西に移されて今日に到っている。３６７ｐ

３１玉村竹二『五山禅僧伝記集成』　講談社　１９８３

休翁普貫

…のち伏見蔵光庵に住し、光明・崇光両法皇・伏見宮栄仁親王を始め、足利義満・義持からも篤信を受け、持律清浄の生涯を送った。なお伏見には別に幽林庵を創めて、茲にも寓した。…

海印善幢

…夢?疎石の会下に転じ、遂にその法を嗣ぐ。西芳寺・宇治蔵勝庵・伏見蔵光庵に住し、晩年足利義満に帰依せられ…

無相中訓

…主として伏見の蔵光庵に住し、伏見宮貞成親王（後崇光院太上法皇）の一族と親近していた。

太虚梵仝

…法を無相中訓に嗣ぎ、終世官刹に出住せず、伏見大光明寺の蔵光庵に住して、黒衣の平僧で終った。

２８加藤次郎『伏見桃山の文化史』　１９５３

蔵光庵

蔵光庵は大光明寺の塔頭ではなかつたらしいが、崇光院以来伏見の御所とは特別に関係が深かつた。…この寺のあつた場所は、宇治見山の南方で桃山御陵道から、桓武陵へ行く道の西北に当るところであつて、寺の鎮守として天満天神が祭つてあつた。１４１ｐ

山の天神

…秀吉築城の際蔵光庵は嵯峨臨川寺の東へ移つたが、天満天神は前田利家が天神は前田家の先祖であるといつて、松平筑前の邸内に移して祭つた。これが後の桃山天満宮であつて、山の天神といつたのである。大手筋国鉄桃山駅踏切の東を北へ上ると、東側に石垣を積み生垣のした空地になつているところが、山の天神社殿の跡である。天保十二年（一八四一）現在の奈良電大手筋の東に遷座したのである。１４１ｐ

山の天神

又山の天神と称し元は桃山御陵道から柏原陵への道の西北に、蔵光庵の鎮守としてあつたものを、慶長元年（一五九六）前田利家がその屋敷内に移したものが、天保十二年（一八四一）までそのまゝ肥前屋敷（松平筑前）にあつた。大手筋国鉄踏切の三十メートル程東方北側に苔清水という有名な井戸があつて、その北方背面に天神社があつた。敷地は東西二十二間南北二十五間で、本社は東西八尺九寸南北七尺七寸檜皮葺であつて、拝殿は瓦葺二間に二間のもの、石鳥居は高さ七尺七寸であつた。手水も一間に四尺瓦葺で附近に末社として白太夫社と称し、現在真福寺にある妙見菩薩を祀つた一間に二間の瓦葺本堂もあつた。本社の西方に一間に一間半の弁天社と成瀧稲荷社と称する瓦葺の小社もあつた。神主居宅として間口二間半桁行五間半の茅葺があつたが、神主は一定せず元禄の頃は奥村右京、安永の頃には本島主殿、天明の頃には僧中祥であつた。２６２ｐ

成滝稲荷社

成滝稲荷社は明治二年（一八六九）には社守本谷市兵衛となつていたが、明治二十年頃小泉伊之助がこの社を守り三回移転したが昭和十九年頃まで、御堂が残つていた。太平洋戦争後戦地から引揚げた大工遠藤がこの堂を同一場所で改築して住んでいるが、柱の大部分と瓦は稲荷社のものである。２６３ｐ

彼は文久二年（一八六七）乙訓郡に生れ、明治二十年（一八八七）頃松平筑前に住むようになつたので彼は松平筑前の草分であつた。天保十二年（一八四一）山の天神社が松平筑前から、奈良電本社前に移つたがその末社成滝稲荷社が、今の片岡安邸内の榎の大木のすぐ北にあつて、敷地は東西六間半、南北八間三分五十四坪あり、江戸時代は年貢地になつていた。社殿は東向で東西四尺二寸・南北二尺五寸あり、その周囲九尺四面の玉垣もあつて、この附近は伏見の本谷市兵衛の年貢地であつた関係上、本谷市兵衛が天神社移転後は成滝稲荷社の社守でもあつた。明治九年（一八七六）土地台帳が出来た頃、松平筑前十九番地宅地五十坪と変つて、本谷市兵衛の所有物であつたのを、小泉伊之助はこの土地と共に買つて小さな家を建て自ら成滝稲荷社々守となり、…３５０ｐ

松平筑前

その頃松平筑前や毛利長門の南部の大部分は、伏見銀座一丁目の米屋本谷市兵衛の所有地であつて、墓の敷地は龍雲寺の西南の畑地二七〇坪と、この墓地に達する道路（服部道）は、大手筋汽車の踏切東の北側から龍雲寺前まで延長約百間、幅二間程を本谷市兵衛から買収した。…

昭和六年（一九三一）三月堀内村が京都市に編入されるまで、納税代人であつた住職は税金だけ支払い、所有権がなかつたから、名義上の所有権者は勝手にこの道路を他人に売却した。つまり松平筑前二十七番地ノ三、七十三坪を教育記念会館敷地の一部に売却し、同二十六番地ノ一、九十坪の中二十二坪を木本麻次郎に売

桃山天満宮又「山の天神」と唱へらる。前田公尊崇と云も道理豊公築城時此所前田利家割賦を受け蔵光庵は嵯峨臨川寺東に移され、此土地神菅公なる故に前田公邸内に残され崇尊されたる乎。（以下略）

２３『旧都巡遊記稿』（『新撰京都叢書』第４巻）臨川書店

桃山天満宮

当社は御香宮の西に隣りて南面し、祭神は菅相公なり。末社に老松社・弁財天・白髪社及び稲荷社等あり。

２４『伏見誌』　伏見町　１９２３

桃山天満宮

御香宮神社ノ西伏見町字観音寺ニアリ今指定村社ニシテ以前ハ桃山ニアリ初メ宇多帝法皇トナラレル前ニ桃山蔵光庵ヲ仮ノ御庵トセラレタル時御同伴申上ゲシ僧月渓或ル夜ノ夢ニ宝塔ノ上ニ峨冠盛服ノ天神顕レタリ之レ我等ノ守神ナリトテ一祠ヲ鎮メタリ山ノ天神トテ其名高ク後年前田利家公ノ尊崇浅カラズ天保十二年今ノ地ニ遷座ス

２５『御大禮記念京都府伏見町誌』伏見町　１９２９

註３「崩御の場所」

陵墓一隅抄云、崇光院九十八代応永五年正月十三日、寶算六十五、伏見御荘蔵光庵に於て崩ず、名勝志「元在伏見隣大光明寺、豊臣秀吉公遷嵯峨臨川寺云々、今御香宮東二町許有天満社、是蔵光庵鎮守云々」天満社は現在の桃山天満宮の旧地を云ふ、両聖記に「かの仙頭伏見殿に引離れて一宇を立てられ移り住を蔵光庵と名けて光蔵れさせ給ひし云々」、「佛徳大通禅師愚中和尚年譜云」応永十五年九月相公請師入京云々十月某日巳到山崎遣使報相公曰老僧有誓不可入帝卿須於城外見於是相公来参迎館伏見蔵光庵云々、「翰林相五鳳集」文安四年二月十一日早赴伏見蔵光庵云々、此時代まで記載あり、…

桃山天満宮

村社、初め伏見御香宮神社の東二町の高地に在りて、山の天神と唱へらる、明徳年間沙門月渓霊夢を蒙り、応永元年神影を僧忠庵より授かり、龍幡山蔵光庵史編第三章第七節末尾「陵墓一隅抄」参照に鎮めたり、豊公築城当時、前田利家同所の割賦を受け、蔵光庵は嵯峨臨川寺東に移されたるが、前田公之を崇尊し、邸内に菅廟を建つ、天保十二年今の地に遷座す、

２６『紀伊郡堀内村地名・町名・名勝・史蹟の沿革』京都市　１９９４（１９３１の調査）

桃山天満宮（一名山の天神という。）

加賀大納言利家の賦割の地へ蔵光庵の鎮守神天満宮社あり。利家郷祖先の社なりし、故己か邸内に移し鎮座す。伏見毀城と共に加賀候邸も亡ひしが同社はそのまま同地に鎮座していたが、天保年間、伏見観音寺町に移転する。

伏見七井ノ一苔清水

山の天神の下にあり。現時、木本久兵衛氏宅、宅地の清水これなり。

２７西野伊之助『伏見叢書』（『新撰京都叢書』第５巻）臨川書店

蔵光庵

…田中百山ノ伏見山ニハ蔵光庵ハ後光厳帝ノ貞治年中ノ建立ト記シ、其位置ヲ其鎮守ノ桃山天満宮ノ松平筑前ニアルヨリ同庵ヲモ同所ニアリシ如ク記シアレトモ、文安ノ伏見山図ニ依レバ月見岡南方ニテ伏見寺石塔ノ北ニ記スヲ見レハ、蔵光庵ハ桃山陵道ヨリ柏原陵ニ達スル間道ノ西方宇治見山南麓ノ地辺ナリトス。而シテ同庵ハ伏見築城ノ時嵯峨臨川寺ノ東ニ移転セシ時、鎮守ノ天満宮ハ前田候ノ貰受ケテ松平筑前ノ地ニ移シタルモノナリ。

２１「桃山天満宮石碑　桃山天満宮境内内石碑（御香宮内）

此の天満宮社は一応永のむかし伏見石井庄に鎮座豊公桃山城を造営み諸藩邸を造らしめらるゝ加賀前田侯邸内なるを遠祖の像に依て祠を改造祭祀も荘厳に挙行れしを時世変遷せしも殷盛なり桃山城は荒さるあはれ祠宇も葎の中に朽果なむ状なるを観音寺住職山本教覚工匠阪田岩次郎は亦心を振起し教覚は資金を募集篤志者本谷市造之を賛け岩次郎は工事を負擔廿年間一日の如く共に労き天保十二年此所に瑞の神殿美しく造竟遷し奉しは最も愛き事なりけり然を許ゝ多の年月を経て甚く破損しか彼の社掌矢野弟一郎有志の人々と謀り修理し奉り又社務所社標玉垣等新設明治三十五年六月千年の大祭仕奉ぬ如此社頭の光輝のます隋に神威いよゝ益曜き渡るらん今般岩次郎男忠兵衛発起て此事跡を碑になしけるになん

明治三十九年三月　　鳥羽重晴謹識

２２田中親之『皇室と因縁ある伏見山　桃山沿遷』私家版（京都市歴史資料館蔵　京都府紀伊郡堀内村字桃山、田中敏子　発行）　１９１４

崇光院崩所は伏見殿にあらずして蔵光庵なりと云論に地名辞書引。聖蹟圖誌曰く。伏見御香宮の東を山村と云。蔵光庵址あり。崇光崩御の所とぞ。蔵光は崇光を誤りたるにあらずやとは餘り珍らしき説なれば参考と為す。此は多分陵墓一隅抄に崇光院九十八代（興仁）應永五年正月十三日寶算六十五。伏見御荘蔵光庵に於て崩ず。伏見大光明寺在山城國紀伊郡後山稱兌長老屋敷地即ち大光明寺址陵在于竹林中とあるに基く乎。此は嘉永七年の記載なり。而して花山院長親卿両聖記に彼の仙洞伏見殿に引き離れて一宇を立てられて移り住まし、所を蔵光庵と名けて光蔵れさせ給ひし云々より源泉来りし乎。長親卿は文章博士にして久しく南朝後村上後亀山両朝に仕へ南北合一に際し吉野より京師に帰りし人にして北朝伏見殿の内事は餘り知悉せざるならむ。然れども此両聖記甚々名文にして信を置かむと為すもの多く、文中明徳の頃云々は合一後なる可く且文中の道堅は法師にして三玉和歌集に其歌二三載す（白玉後柏原碧、玉冷泉政為、雪玉内大臣三条西実隆の撰なり）。而して雪玉集に斯くて伏見の御寺に詣てたりしに越し方の御荒ましなと思ひ出して奉りて「山の色縁の洞と契りしはかなき秋を訪ふ時雨かな」道堅あり。此は蔵光庵なるや将た大光明寺なるや明かならねども、両聖記の始めに縁蘿の洞に住み換へさせ給ふ云々あり。此両聖記を信ずる時は移り住まし、云々あるを以て崇光上皇鬱々楽まざる中に此堂宇に移られたるものならむを察す。然れども此を以て未だ崩所なりと断言するは不可なり。元来此両聖記は蔵光庵鎮守神天満宮の縁起様のものにして道堅の幻見と伴僧月渓の夢感に由りて、北野大自在天神を蔵光庵土地神に勧請し、朝夕焼香供養云々あるに外ならず。而して此天満大自在天神は今の桃山天神是なり。

蓋し蔵光庵は後光厳帝の貞治年中建立海印善幢開基和尚行状云。海印和尚塔を蔵光と曰ひ山を龍幡と曰ふ。室に就已と扁し興運研桂密機皈雲等諸寮を有すと山城名勝誌は載す。幻居山人随筆蔵光院海印幢とあり。海印和尚行状又云和尚塔在仁和曰蔵勝庵又云海印善幢和尚城州石田有塔曰實境とあり（今は影なし）海印善幢如何なる人なるや。其傳記を知らざれば能く明言し難きも、蔵字を好む人と見ゆ。而して貞治年中蔵光庵建立と為せば其頃は光厳上皇崩御の時代にして光明上皇尚を伏見殿に居られ後光厳帝と崇光院とは未だ甚しき確執あらず。即ち鬱閉不平を抱かるゝ時にあらずして、両聖記の所謂崇光の光を蔵して云々も要せざる状況なり。（中略）序ながら此天神は以前御香宮の東二町高地に在て

１２『山城志』（『日本輿地通志』）　国立国会図書館蔵　YD-古-2233；YD-古-5548（マイクロフィルム）

天龍寺の蔵光庵

曰蔵光庵自二伏見山一遷二于此ニ一

蔵光廃庵

在二御香ノ宮ノ東二町一、藤ノ長親卿ノ所レ述二両聖記一、豊太閤遷二寺ヲ京西嵯峨ノ臨川寺界内ニ一、其天満ノ神祠今尚存焉

１３『山城名跡巡行志』（『新修　京都叢書』第２２巻）

天神社

在二大和街道ノ東大手筋ノ北ニ一。鳥居南向社同。所レ祭二天満天神一。此地始メ在二禅刹一。号二龍幡山蔵光庵ト一。貞治元年七月住持月渓感霊夢ヲ所二勧請スル一也。光厳院、光明院、崇光院三帝勅願之神祠也。応永年中再興其ノ蔵光庵今在二嵯峨天龍寺界内ニ一。

蔵光院

自二伏見山一遷レ此

１４『伏見鑑』（『新撰京都叢書』第５巻）臨川書店

蔵光庵

御香宮の東二町計に有、秀吉公寺を嵯峨臨川寺の界内に移さる、今の山天神の小祠ハ蔵光庵の鎮守なり。

１５『拾遺都名所図会』（『新修　京都叢書』第７巻）臨川書店

桃山天満宮

龍雲寺の西にあり。祭神渡唐天神の影像を鎮め奉る。明徳門の僧忠庵より授り、龍幡山蔵光庵の鎮守とす。文録三年、伏見の城を築き給ふ時、蔵光庵は嵯峨臨川寺のひがしに移す。天神の御社はこゝに残りて、俗に山の天神と称す。例祭は六月廿五日。

１６『洛西嵯峨名所案内記』（『新撰京都叢書』第１巻）臨川書店

天龍寺の蔵光庵

寿寧院　天龍寺塔頭　　蔵光庵　同上

１７『宇治川両岸一覧』（『淀川両岸一覧　宇治川両岸一覧』）柳原書店　１９７８

桃山天満宮

龍雲寺の西にあり。祭神渡唐天神の影像を鎮め奉る。明徳の頃、沙門月渓、霊夢蒙り、其後応永元年に、神影を同門の僧忠庵よりさづかり、龍幡山蔵光庵の鎮守とす。文禄三年、伏見の城をきづき給ふ時、蔵光庵は嵯峨臨川寺のひがしに移す。天神の御やしろはこゝに残りて、俗に山の天神と称す。例祭は六月廿五日。

１８『花洛羽津根』（『新撰京都叢書』第２巻）臨川書店

霊亀山天龍寺塔中洛西下嵯峨

…鹿王院　寿寧院　蔵光庵　花徳院…

１９『首註陵墓一隅抄』　国立国会図書館蔵　YDM6200（マイクロフィッシュ）

九十八代

崇光院　興仁

三年

応永五年正月十三日　六十五

於二伏見御荘蔵光庵一

法―

２０『伏見大概記（若林正治氏旧蔵本）』（『新撰京都叢書』第５巻）臨川書店

肥前屋敷天満宮

此社当時観音寺境内田引ニ有之

5 黒川道祐『日次紀事』（『新修　京都叢書』第4巻）臨川書店

崇光院ノ御忌

所謂伏見ノ　法皇ニシテ般舟院并ニ天龍寺蔵光庵及ヒ地蔵院ニ修二ス之ヲ一

後伏見院ノ御忌

延元元年今日崩ス、嵯峨蔵光庵ニ修二ス之ヲ一

光明院ノ御忌

康暦二年今日崩ス、天龍寺蔵光庵并ニ勝尾寺ニ修二ス之ヲ一

光厳院ノ御忌

貞治二年今日崩ス、天龍寺ノ末寺蔵光庵ニ有二リ　御牌一號二ス金剛院ト一則修二ス法事ヲ一

伏見殿貞成親王忌

號二ス後ノ崇光院ト一法號ハ道欽、天龍寺蔵光庵相国寺大光明寺ニ修二ス之ヲ一

6 黒川道祐『嵯峨行程』（『新修　京都叢書』第12巻近畿歴覧記より）臨川書店

蔵光院

蔵光院ハ光明帝ノ御寺ナリ、元ト伏見ニアリ、秀吉公伏見ノ城ヲ築キ玉フトテ、天龍寺ノ末寺ナルニヨリ、此ノ處ニ移サシム、

7 黒川道祐『雍州府志』（『新修　京都叢書　第10巻）臨川書店

蔵光庵

在二リ同處ニ一、始メ在二リ伏見ニ一、安二ス　光明院之牌ヲ一、豊臣秀吉公築ク伏見ノ城ヲ時移二ス大井河ノ東邊ニ一則為二リ天龍寺之末派一

8『山城名勝志』（『新修　京都叢書』第13・14巻）臨川書店

天龍寺蔵光庵

號二龍幡山一。貞和年中建立。開基海印和尚。安二光明院碑一。為二天龍寺末派一。元二在伏見一。豊臣秀吉公築二伏見城一時移二臨川寺東一。委細載二于紀伊郡之巻一。

海印和尚善幢行状云。海印和尚塔ヲ曰二蔵光一ト。山ヲ曰二龍幡一ト。室ヲ扁二ス就己一ト。有二興運斫桂密機帰雲等ノ寮一。

蔵光庵

元在二伏見一。隣二大光明寺一。豊臣秀吉公遷二嵯峨臨川寺東一。又載二葛野郡巻一今御香宮東二町許有二天満社一。是蔵光庵鎮守云々。

9『山州名跡志』（『新修　京都叢書』第15・16巻）臨川書店

天神宮

在御香宮東一町許林中　鳥居南向木柱　宮南向　所祭　天満神

安神木像　当宮鎮座記不詳　宮再興ノ記板宮内ニアリ。応永十六年六月一日

10「伏見山寺宮近廻地図大概」（『御大礼記念京都府伏見町誌』）所収

蔵光庵

（月見ノ丘南方に描く）

11『伏見大概記（岡本正氏所蔵本）』（『新撰京都叢書』第5巻）臨川書店

肥前屋敷天満宮

境内東西三十間南北廿三間但シ慶長年中、前田利家卿之御時代鎮座宮守奥田左門

資料集（適宜返り点、句読点を付した）

1「絶海中津書状」「慈照院文書」（東大史料編纂所　影写本3071.62-112）

蔵光庵事、光明院勅願異レ他御事候間、御一期之後者、誰人御方へ雖二付嘱候一、我々同門御事候間、非下可二見放申一事上候、今時分殊更観庵主御住候者、尤可レ然相存候、昨日観庵主対面之時、此事再三雖二辞退候一、様々問答申候間不レ可レ有二子細一之由、御領掌候、御心安可下被二思食一候上哉、明日之程ニ以二参拝一重可二申定一候、尚々此事無二相違一候間、悦喜此事候、恐惶敬白、

十月十一日　　中津（花押）

蔵勝庵侍司

2『両聖記』（『群書類従』第1輯）

…かの仙洞にひきはなれて、一宇をたてられて、うつり住ましましし所を蔵光庵となつけて、光かくれさせ給し後より、御門徒の尊宿、いにしへのみことのりをたかへす、まもりおこなひ給めり、今の幽林主翁、すなはち其人になむおはす、明徳の頃（中略）其後応永元年の秋。幽月同門の僧忠庵のかたより天神無準に受衣し給ける御姿を圖したる形象とて幽林に奉れる。月渓これをみるに夢に見奉りし儀貌衣冠にたがふことなし。いと不思議なることになん。幽林感歎のあまり。つら〳〵是を思ひめぐらされけるは。此庵もとより寶塔をたてゝ。中に法華を安じて本尊とす。道賢はうつゝに拝し月渓は夢にみる。塔婆法華これをなし。又もとめざるに彼真影こゝに降臨しまします。これひとへに祖宗をまもり法道をたすけましますべき神慮にや。縁遇時いたり。機感相応するにこそと。信心いよ〳〵深きによりて。當庵永代の土地神に勧請し奉りて。朝夕の焼香供養。懇誠をつくされけり。かの仙洞につかふまつる人々。此事どもを伝きゝて。和歌を詠じて法楽しけるに。近辺閑居の僧どももをの〳〵志をのべてあつめて一軸をなせり。…

3「伏見蔵光庵替地願」（『大中院文書』一九四『叢書京都の史料9』）京都市歴史資料館　２００６

一九四　伏見蔵光庵替地願

「伏見　蔵光庵」

伏見蔵光庵敷地、関白様御屋敷に被二召置一候間、則壊申候、然者替地等被二仰付一候様、御取成奉二頼存一候、当庵之儀は、九十七代目之帝王号二光明院一、院之御所として被レ成二御移一たる皇居候、御寺成可レ然様、御取合奉二頼存一候、以上、

七月三日　　秀備（花押）

松田勝右衛門尉殿

4『村井重頼覚書』（『加賀藩史料』　第1編　文禄4年8月24日）

秀次御屋形

其後関白様御身上相果被成、色々の儀候て、伏見之御屋形を大納言様へ太閤様被進、後日本之諸大名あがまへ被申候。色々さまさま恩事候。